高崎市文化財調査報告書　第443集

宮原町遺跡3

―工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2019

高崎市教育委員会
森永製菓株式会社
技研コンサル株式会社

宮原町遺跡 3

―工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2019

高崎市教育委員会
森永製菓株式会社
技研コンサル株式会社

例　　言

1　本書は工場建設に伴う「宮原町遺跡３」（市遺跡調査番号 753）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、森永製菓株式会社の費用負担によって実施された。記して感謝の意を申し上げます。

3　遺跡の発掘調査および整理作業は、森永製菓株式会社から委託を受けた技研コンサル株式会社が、高崎市教育委員会文化財保護課の指導のもと実施した。

4　発掘調査および整理事業の体制は下記のとおりである。

遺跡名	宮原町遺跡３
遺跡所在地	群馬県高崎市宮原町２番地１
監理指導	高崎市教育委員会文化財保護課
調査担当	山田誠司（技研コンサル株式会社）
調査員	中村岳彦　松村春樹（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	Ａ区：平成 30 年 12 月４日～平成 30 年 12 月 27 日
	Ｂ区：令和元年６月 10 日～令和元年６月 28 日
整理作業期間	平成 30 年 12 月 28 日～令和元年９月 30 日
調査面積	4,485.9 ㎡（Ａ区：2,605.9 ㎡、Ｂ区：1,880.0 ㎡）
発掘調査参加者	関口凌生（技研コンサル株式会社）
	小澤宏之　秋山　修　新井　實　伊丹茂一　池田正恵　上沢公一　宇賀神光
	楳原義久　遠藤好則　太田英明　太田文江　岡　眞　加藤知恵子　鴨田榮作
	柄澤陽子　北爪二郎　木暮朱実　木暮廣一　木暮知二　今野妙子　佐藤文江
	佐復　進　設樂和男　高橋一巳　田部井美砂子　土屋和美　中嶋知恵子
	西潟　登　西山康子　平澤小夜子　福田邦弘　星野　博　村田稔男　矢島昭司
	矢島正志　山口直子　吉井正宏　吉浦英和　吉田俊宏
整理作業参加者	石川承子　河本ちさと　小林　和　杉田友香　細野竹美

5　本書の編集は山田が行い、執筆はＩを高崎市教育委員会文化財保護課が、Ⅴ－２・Ⅵ－２を松村が、その他を山田が行った。

6　発掘調査で出土した遺物および図面等の資料は、一括して高崎市教育委員会で保管されている。

7　発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の機関に御協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）
　高崎森永株式会社　株式会社熊谷組　山下工業株式会社

凡　　例

1　挿図中の方位北は座標北を示し、座標については世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用した。

2　挿図に国土地理院発行 1/25,000『高崎』『前橋』、高崎市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。

3　写真図版扉に国土画像情報（空中写真）、ＭＫＴ 614- Ｃ９-11・12、ＭＫＴ 614- Ｃ 10-10・12（1961 年７月 25 日撮影）を合成・編集して使用した。

4　土層および遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。

5　掲載図面の縮尺は全体図は 1/500、遺構図は 1/60 を基本とし、それ以外のものは右下にスケールを示した。

6　遺物実測図および拓影図の縮尺は1/3を基本とし、それ以外のものについては右下にスケールを示した。

7　本文および表中の計測値については（　）は残存値、〔　〕は復元値を表す。

8　遺物写真図版は1/3に近づけるように撮影を行い、それ以外のものについては右下に（　）で示した。

9　遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

遺構　水田被覆火山灰：　　遺物　須恵器：　　釉薬：

10　断面図上の範囲記号は水田畦畔を示す。

11　主な火山灰降下物等の略称と年代は次の通りである。

浅間Ａ軽石（As-A）－天明３年（1783）浅間山噴火による降下テフラ

浅間Ｂ軽石（As-B）－天仁元年（1108）浅間山噴火による降下テフラ

榛名二ッ岳伊香保テフラ（Hr-FP）－６世紀中葉の榛名山二ッ岳噴火による降下テフラ

榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA）－５世紀末～６世紀初頭の榛名山二ッ岳噴火による降下テフラ

浅間Ｃ軽石（As-C）－３世紀後葉～４世紀初頭の浅間山噴火による降下テフラ

目　　次

例言

凡例

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 1

1　地理的環境…… 1

2　歴史的環境…… 1

Ⅲ　調査の方法と経過 …… 4

Ⅳ　基本層序…… 4

Ⅴ　検出された遺構と遺物…… 7

1　Ａ区…… 7

（１）調査の概要…… 7

（２）As-B軽石下水田 …… 7

（３）溝…… 9

（４）ピット…… 9

2　Ｂ区…… 15

（１）調査の概要…… 15

（２）As-B軽石下水田 …… 15

（３）溝…… 16

（４）ピット…… 16

Ⅵ　調査の成果とまとめ …… 18

1　調査の成果…… 18

2　As-B軽石下水田と条里型地割について … 18

（１）坪交点の検討…… 18

（２）坪内区画の検討…… 19

（３）用水の変遷…… 21

4　おわりに…… 21

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… iv

第２図　高崎の地形 …… iv

第３図　周辺遺跡図 …… 2

第４図　調査区位置図 …… 2

第５図　基本層序 …… 5

第６図　Ａ区調査区全体図…… 6

第７図　Ａ区As-B軽石下水田畦畔断面図、農耕具痕平面図 …… 8

第８図　Ａ区１号溝平面図…… 10

第９図　Ａ区１号溝断面図…… 11

第10図　Ａ区２～５号溝、１号ピット平面図・断面図…… 12

第11図　Ａ区１号溝出土遺物 …… 13

第12図　Ｂ区調査区全体図…… 14

第13図　Ｂ区As-B軽石下水田畦畔断面図 …… 16

第14図　Ｂ区１・２号溝、１号ピット平面図・断面図…… 17

第15図　宮原町遺跡３周辺の旧地形と条里型地割 …… 19

第16図　本遺跡周辺の坪内区画 …… 20

第17図　Ａ区１号溝想定変遷図 …… 21

表目次

第１表　Ａ区As-B軽石下水田計測表 …… 8
第２表　Ａ区出土遺物観察表 …… 13
第３表　Ｂ区As-B軽石下水田計測表 …… 15

写真図版目次

PL.１　Ａ区調査区全景（西から）

PL.２　Ａ区As-B軽石下水田東側近景（東から）
Ａ区畦畔Ａ－Ａ’（南から）
Ａ区畦畔Ｂ－Ｂ’（西から）
Ａ区畦畔Ｃ－Ｃ’（西から）
Ａ区畦畔Ｄ－Ｄ’（南から）

PL.３　Ａ区畦畔Ｅ－Ｅ’（南から）
Ａ区畦畔Ｆ－Ｆ’（西から）
Ａ区畦畔Ｇ－Ｇ’（西から）
Ａ区畦畔Ｈ－Ｈ’（北から）
Ａ区畦畔Ｉ－Ｉ’（南から）
Ａ区畦畔Ｊ－Ｊ’（南から）
Ａ区畦畔Ｋ－Ｋ’（西から）
Ａ区畦畔Ｌ－Ｌ’（東から）

PL.４　Ａ区畦畔Ｍ－Ｍ’（南から）
Ａ区畦畔Ｎ－Ｎ’（南から）
Ａ区農耕具痕完掘状況（北から）
Ａ区As-B軽石下水田調査風景（南から）
Ａ区１号溝全景（東から）

PL.５　Ａ区１号溝２面完掘状況（西から）
Ａ区１号溝３面完掘状況（西から）
Ａ区１号溝３面完掘状況（東から）
Ａ区１号溝３面遺物出土状況（東から）
Ａ区２号溝全景（北から）
Ａ区３号溝全景（南から）
Ａ区４・５号溝全景（北から）
Ａ区１号溝調査風景（西から）

PL.６　Ｂ区調査区全景（西から）

PL.７　Ｂ区調査区全景（東から）
Ｂ区As-B軽石下水田西側近景（東から）

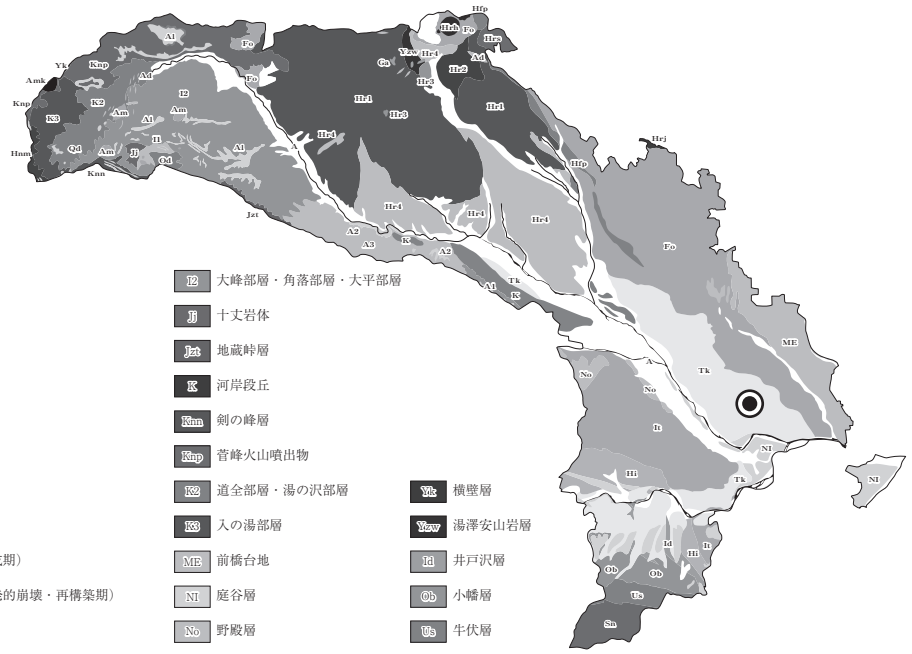
PL.８　Ｂ区畦畔Ａ－Ａ’（南から）
Ｂ区畦畔Ｂ－Ｂ’（南から）
Ｂ区畦畔Ｃ－Ｃ’（西から）
Ｂ区畦畔Ｄ－Ｄ’（南から）
Ｂ区畦畔Ｅ－Ｅ’（西から）
Ｂ区As-B軽石下水田調査風景（南から）
Ｂ区１号溝全景（西から）
Ｂ区２号溝全景（北から）

PL.９　Ｂ区１・２号溝全景（西から）
Ａ区基本土層Ａ（西から）
Ａ区基本土層Ｂ（北から）
Ａ区基本土層Ｃ（北から）
Ａ区基本土層Ｄ（東から）

PL.10　Ｂ区基本土層Ｅ（北から）
Ｂ区基本土層Ｆ（北から）
Ｂ区基本土層Ｇ（北から）
Ｂ区基本土層Ｈ（東から）
出土遺物

国土地理院発行　20万分1「宇都宮」「長野」を使用し、縮尺を改変

第１図　遺跡位置図



A	低地
Ad	安山岩岩脈
Al	安山岩溶岩
Am	安山岩岩体
Amk	浅間隠山岩体
A1	大戸貝部層・長岩部層・森熊部層
A2	茶臼山溶結凝灰岩層
A3	長者久保層・相吉部層
Fo	山麓堆積物
Ga	ガラメキ層
Hfp	榛名山二ッ岳伊香保テフラ
Hnm	鼻曲層
Hth	榛名富士溶岩円頂部
Hrj	陣場岩屑なだれ堆積物
Hr0	相馬山溶岩円頂丘
Hr1	榛名火山第１期の噴出物（主成層火山体の形成期）
Hr2	榛名火山第２期の噴出物（主成層火山体の爆発的崩壊・再構築期）
Hr3	榛名火山第３期の噴出物（側噴火期）
Hr4	榛名火山第４期の噴出物（火砕流噴出・カルデラ形成期）
It	板鼻層
Il	焼榊部層
I2	大峰部層・角落部層・大平部層
Jj	十丈岩体
Jst	地蔵峠層
K	河岸段丘
Km	剣の峰層
Knp	菅峰火山噴出物
K2	道全部層・湯の沢部層
K3	入の湯部層
ME	前橋台地
NI	庭谷層
No	野殿層
Od	大平岩体
Qd	閃緑岩ないし石英閃緑岩
Tk	高崎台地
Yk	横壁層
Ysw	湯澤安山岩層
Id	井戸沢層
Ob	小幡層
Us	牛伏層
Hi	原市層
Sn	三波川ユニット

新井房夫･群馬県地質図作成委員会1999「群馬県10万分の1地質図」に加筆

第２図　高崎の地形

Ⅰ　調査に至る経緯

平成30年８月、森永製菓株式会社と工事主体者株式会社熊谷組から、高崎市宮原町において計画している工場建設に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課(以下、市教委と略)にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である宮原遺跡に隣接し、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。開発計画が具体化した同年８月23日には、市教委へ埋蔵文化財試掘(確認)調査依頼書と文化財保護法に基づく届出が提出され、同年10月３日から５日の３日間で試掘(確認)調査を実施した。その結果、平安時代の水田跡が検出され、埋蔵文化財の所在が明らかになった。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお、遺跡名については「宮原町遺跡３」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成30年11月28日に森永製菓株式会社と民間調査機関である技研コンサル株式会社との間で契約を締結、また同日に森永製菓株式会社・技研コンサル株式会社・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。

その後、工場建設部分に計画変更があり、平成31年４月12日に変更部分の試掘調査を実施した。結果は前回同様に平安時代の水田跡が検出された。令和元年６月６日に森永製菓株式会社と民間調査機関の技研コンサル株式会社との間で変更契約を締結、また同日に森永製菓株式会社・技研コンサル株式会社・市教委での三者変更協定も締結した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

宮原町遺跡３はJR倉賀野駅から西へ約１kmの市南東部、高崎市宮原町に所在する。北側に倉賀野バイパス、南側にJR高崎線が走っている。周辺では低湿地は水田化され、微高地は集落として利用されていたが、近代以降、大規模な市街地化や工業団地造成等の開発が進んでおり、本遺跡周辺も開発が進められている。

本遺跡は約24,000年前（洪積世後期）の浅間山を構成する黒斑山の大規模噴火に伴う山体崩落による火山泥流堆積物（前橋泥流）と、それを被覆する水成ローム層から成る台地に立地する。この台地は烏川から井野川にかけての範囲が高崎台地、井野川の左岸が前橋台地とされ、本遺跡は高崎台地南端部に位置し標高は約88ｍを測る。また、高崎台地は利根川・井野川・烏川等の多数の河川が貫入し、微高地と後背湿地となる低地部に区分されている。これまでの発掘調査の成果により、弥生時代以降は微高地上に集落が展開し、低地部は水田が営まれていたことが確認されている。周辺では烏川から取水した長野堰が南東流し、高関町付近で分水した地獄堰・倉賀野堰・矢中堰等が流れており、多くの水系が存在する地域である。

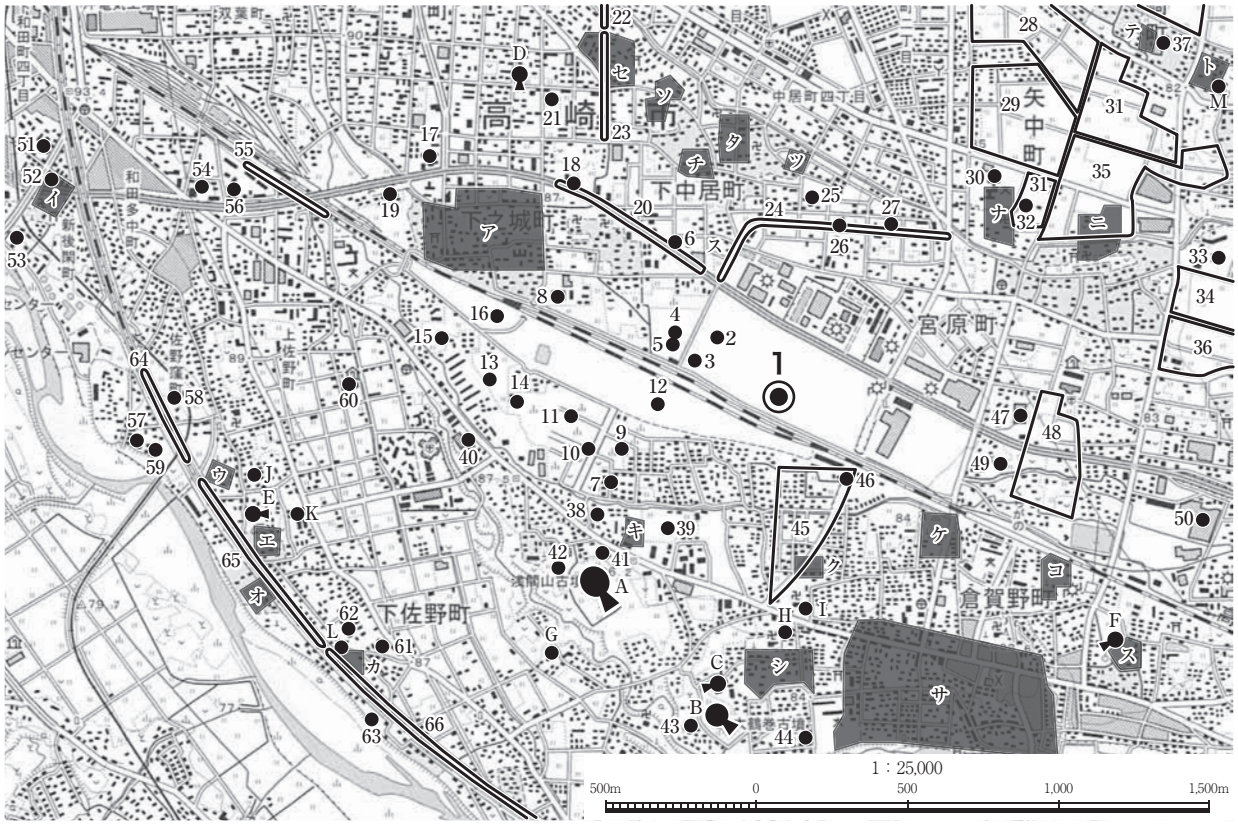
２　歴史的環境

旧石器時代

本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は検出されていないが、烏川左岸段丘南端の岩鼻坂上北遺跡において尖頭器が出土している等、遺物の出土は散見される。

縄文時代

縄文時代になると生活の痕跡が認められるようになり、近隣では烏川左岸の下佐野遺跡Ⅰ・Ⅱ地区（65・66）で前期から中・後期の集落が発見され、また倉賀野万福寺遺跡Ⅰ・倉賀野万福寺Ⅱ遺跡（44）等は縄文時代中期を中心とした遺構・遺物が確認されている。その他、遺構は見られないが倉賀野条里Ⅳ遺跡（45）等で縄文土器

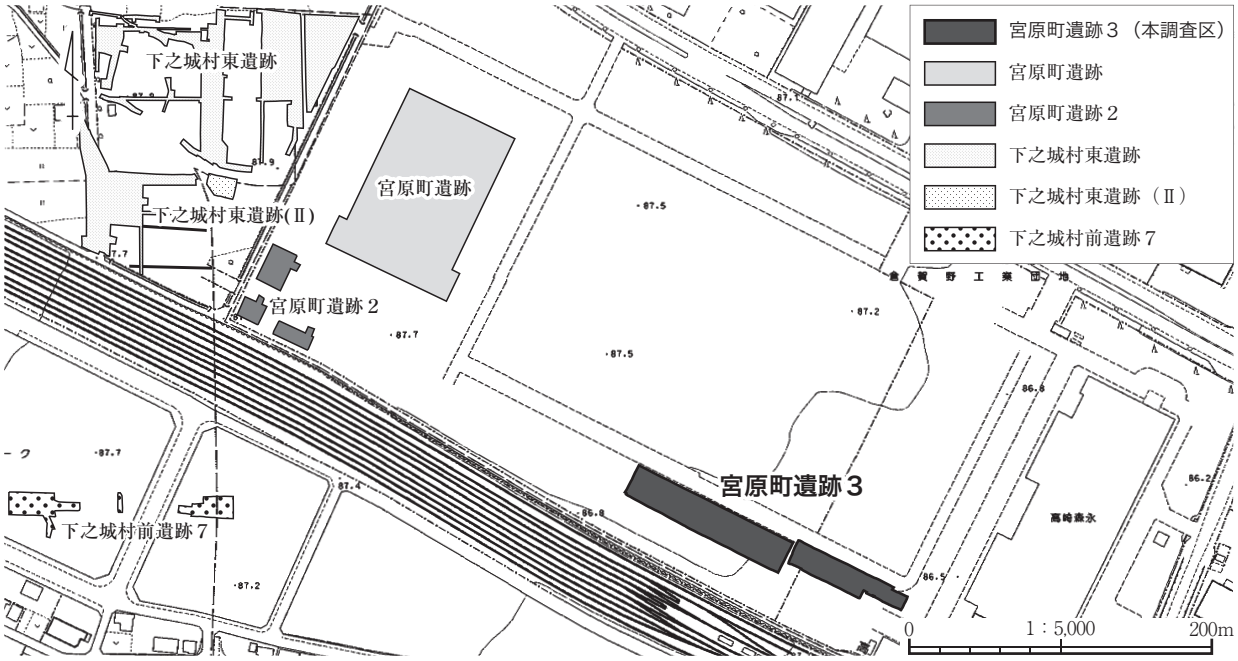


1．宮原町遺跡３（本調査区） 2．宮原町遺跡　3．宮原町遺跡２　4．下之城村東遺跡　5．下之城村東遺跡（Ⅱ）　6．下之城・村東遺跡３　7．下之城村前遺跡　8．下之城村前Ⅱ遺跡　9．下之城村前Ⅲ遺跡　10．下之城村前Ⅳ遺跡　11．下之城村前Ⅴ遺跡　12．下之城村前遺跡７　13．下之城仲沖遺跡　14．下之城仲沖Ⅱ遺跡　15．下之城仲沖遺跡３　16．下之城仲沖遺跡４　17．下之城村北遺跡 18．下之城村北Ⅱ遺跡　19．下之城村西遺跡　20．下之城条里遺構　21．上中居島薬師遺跡　22．上中居前屋敷遺跡（１～４次）　23．下中居天神裏遺跡１・２　24．下中居条里遺跡　25．下中居条里Ⅱ遺跡　26．下中居条里Ⅲ遺跡　27．矢中村西Ⅰ遺跡　28．矢中天王前遺跡　29．矢中村北Ａ遺跡　30．矢中宝昌寺裏遺跡　31．矢中柴崎前・村北Ｂ遺跡　32．矢中村北Ｃ遺跡　33．矢中村東遺跡　34．矢中村東Ｂ遺跡　35．柴崎下村北・砂内遺跡　36．矢中村東Ｃ遺跡　37．柴崎村間遺跡　38．倉賀野上新堀遺跡　39．倉賀野下新堀遺跡　40．倉賀野西上正六遺跡　41．倉賀野東上正六遺跡　42．倉賀野東上正六遺跡（２次）　43．倉賀野丙下正六遺跡　44．倉賀野万福寺Ⅱ遺跡　45．倉賀野条里Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡　46．倉賀野続橋遺跡（倉賀野条里Ⅵ遺跡）47．倉賀野下天神遺跡　48．倉賀野駅北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡　49．倉賀野上樋越遺跡　50．倉賀野中里前遺跡　51．新後閑遺跡　52．新後閑遺跡２　53．下後閑町寺廻遺跡（２次）　54．和多田中遺跡　55．双葉町Ⅰ遺跡　56．上佐野樋越遺跡　57．上佐野船橋遺跡　58．上佐野船橋Ⅱ遺跡　59．上佐野船橋Ⅲ遺跡　60．下佐野観音塚遺跡　61．下佐野一本木遺跡　62．下佐野一本木遺跡２　63．下佐野長者屋敷遺跡　64．船橋遺跡　65．下佐野遺跡Ⅰ地区・寺前地区　66．下佐野遺跡Ⅱ地区

A．浅間山古墳　B．大鶴巻古墳　C．小鶴巻居古墳　D．越後塚古墳　E．漆山古墳　F．長賀寺山古墳　G．大山古墳　H．一本杉古墳　I．安楽寺古墳　J．御堂塚古墳　K．蔵王塚古墳　L．長者屋敷天王山古墳　M．柴崎蟹沢古墳

ア．和田下之城　イ．新後閑屋敷　ウ．佐野屋敷　エ．堀口屋敷　オ．清水屋敷　カ．夕張長者屋敷　キ．倉賀野新堀遺跡　ク．上稲荷前屋敷　ケ．永泉寺砦　コ．養報寺　サ．倉賀野城　シ．倉賀野西城　ス．倉賀野東城　セ．下中居新屋敷　ソ．高尾屋敷　タ．下中居佐藤屋敷　チ．下中居福田屋敷　ツ．道場屋敷　テ．村間屋敷　ト．蟹沢屋敷　ナ．栗原屋敷　ニ．下村北屋敷

第３図　周辺遺跡図



第４図　調査区位置図

が出土しており、周辺で縄文時代の遺跡が存在する可能性がある。

弥生時代

本遺跡周辺の烏川左岸沿いでは弥生時代の遺跡は検出されていないが、北西部には学史的に著名な竜見町遺跡や高崎競馬場遺跡等で弥生時代中期、高関村前遺跡では弥生時代後期の遺構・遺物が確認されている。遺構としては環濠や方形周溝墓等が検出されているが、上述のように本遺跡周辺での検出例はなく、特に弥生時代後期以降の遺跡の分布は、井野川流域の沖積地に移動するようである。

古墳時代

古墳時代になると遺跡数は前時代に比べ急激に増加する。微高地に集落を造り低地に水田を営み、井野川や烏川流域には墳墓が造営されるようになる。上佐野船橋Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（57～59）、船橋遺跡（64）、下佐野遺跡Ⅰ・Ⅱ地区（65・66）、倉賀野万福寺Ⅱ遺跡（44）等、前期から後期にかけての集落域・墓域が烏川左岸に展開する。

また、本遺跡周辺の烏川左岸、下佐野町から倉賀野町にかけての段丘上には大規模な古墳群が形成された。現在ではその多くが消失してしまっているが、かつては300基以上の古墳が存在していたようである。その中でも、４世紀末～５世紀初頭の築造と推定され墳丘長171.5ｍを測る浅間山古墳（Ａ）や、その南東に位置する大鶴巻古墳（Ｂ）・小鶴巻古墳（Ｃ）の前方後円墳は、当地域を掌握した首長層の存在を窺わせるものである。また、大鶴巻古墳の北東に造られた安楽寺古墳（Ｉ）は、凝灰岩の切石を用いた横口式石槨が採用された終末期古墳として著名である。さらに本遺跡北部の微高地上では前方後円墳である越後塚古墳（Ｄ）や、４面の青銅鏡が出土した円墳の柴崎蟹沢古墳（Ｍ）等、多くの古墳が築造された。これらの古墳のみならず、上中居辻薬師遺跡の５次調査では古墳時代中期頃と考えられる７号溝から破鏡が出土しており、当地域の勢力の大きさを物語るものとなっている。

奈良・平安時代

続く奈良時代は前橋市元総社町付近に国府が造営され、条里型地割に基づく大規模な耕地開発が行われた時期である。周辺の微高地や台地縁辺部に船橋遺跡（64）、下佐野遺跡（65・66）や倉賀野駅北遺跡（48）等の集落が展開し、それに続く低地部においては水田跡が検出されており、広範囲にわたって生産域として開発される状況が分かっている。これらの水田跡は天仁元年（1108）の浅間山の噴火による As-B 軽石層に覆われた水田跡であり、下之城、下中居、矢中、倉賀野地域では条里型地割が採用されている。下之城村前Ⅲ遺跡（９）、下中居条里遺跡（24）、矢中天王前遺跡（28）等では約109ｍ間隔で大畦畔が確認されている。所謂「条里制」の施工時期については不明な点も多いが、本遺跡の東に位置する前橋市の西田遺跡では９世紀後半代の竪穴住居跡を切って条里地割を伴う水田跡が確認されており、遅くとも９世紀代には水田開発が行われたと思われる。

中世

中世から戦国時代にかけては倉賀野氏や和田氏等がこの地で勢力を伸ばし、倉賀野城（サ、応永年間に築城）や和田下之城（ア、永禄５～６年頃に築城）等の城館が多く築かれるようになる。下之城村前Ⅳ遺跡（10）では中世居館跡が確認されており、和田下之城関連の遺構と考えられている。これらの城館は天正18年（1590）の豊臣勢の侵攻による小田原城落城に伴い廃城となった。

近世

近世になると倉賀野は中山道の宿場町として発展を遂げる。同時に利根川水運の河岸も開設され、江戸と信越を結ぶ交通の要衝として栄えることとなった。

遺構としては、天明３年（1783）に浅間山が噴火し、降り積もった火山灰（As-A）を地中に埋めて処理した所謂「復旧痕（灰掻き穴）」が検出される遺跡もあり、当時の被害状況を伝えている。

Ⅲ　調査の方法と経過

今回の発掘調査は、高崎市教育委員会による試掘調査の結果に基づき、工場建設予定地内のうち現状保存の不可能な部分（4,485.9 ㎡）を対象として、２つの調査区（Ａ区：2,605.9 ㎡、Ｂ区：1,880.0 ㎡）に分割した形で実施することとなった。遺構確認面まで 0.7 ㎥バックホーを用いて掘削し、掘削廃土の搬出には 10 ｔダンプを使用した。遺構検出後に遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の手順で実施した。調査記録の座標は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用している。図面作成はトータルステーション･電子平板を用いての測量･編集を行い、記録写真は 35mm モノクロ・リバーサル、デジタルカメラの３種類を用いて撮影し、調査区の全景撮影については高所作業車を用いた。

発掘調査はＡ区において平成 30 年 12 月４日より表土掘削を始め、As-B 軽石層の検出を行った。同時に畦畔の検出と水田面および溝・ピットの調査を行い、12 月 26 日に全景撮影を実施した。12 月 27 日までに撤収作業を終え、Ｂ区の発掘調査まで中断期間を挟むこととなった。

翌、令和元年６月 10 日からＢ区の発掘調査を開始し、表土掘削を実施し As-B 軽石層の検出を行った。順次、畦畔の検出と水田面および溝・ピットの調査を行い、６月 26 日に高所作業車にて全景撮影を実施した。６月 28 日に撤収作業を含めた現地での調査を全て終了した。

整理作業および報告書作成については、平成 30 年 12 月 28 日よりＡ区の出土遺物の基礎整理・遺物実測・遺物写真撮影、遺構図編集等を断続的に進めた。そして、Ｂ区の現地調査が終了した令和元年７月１日からＢ区の整理作業を開始し、本格的な報告書作成作業を実施した。

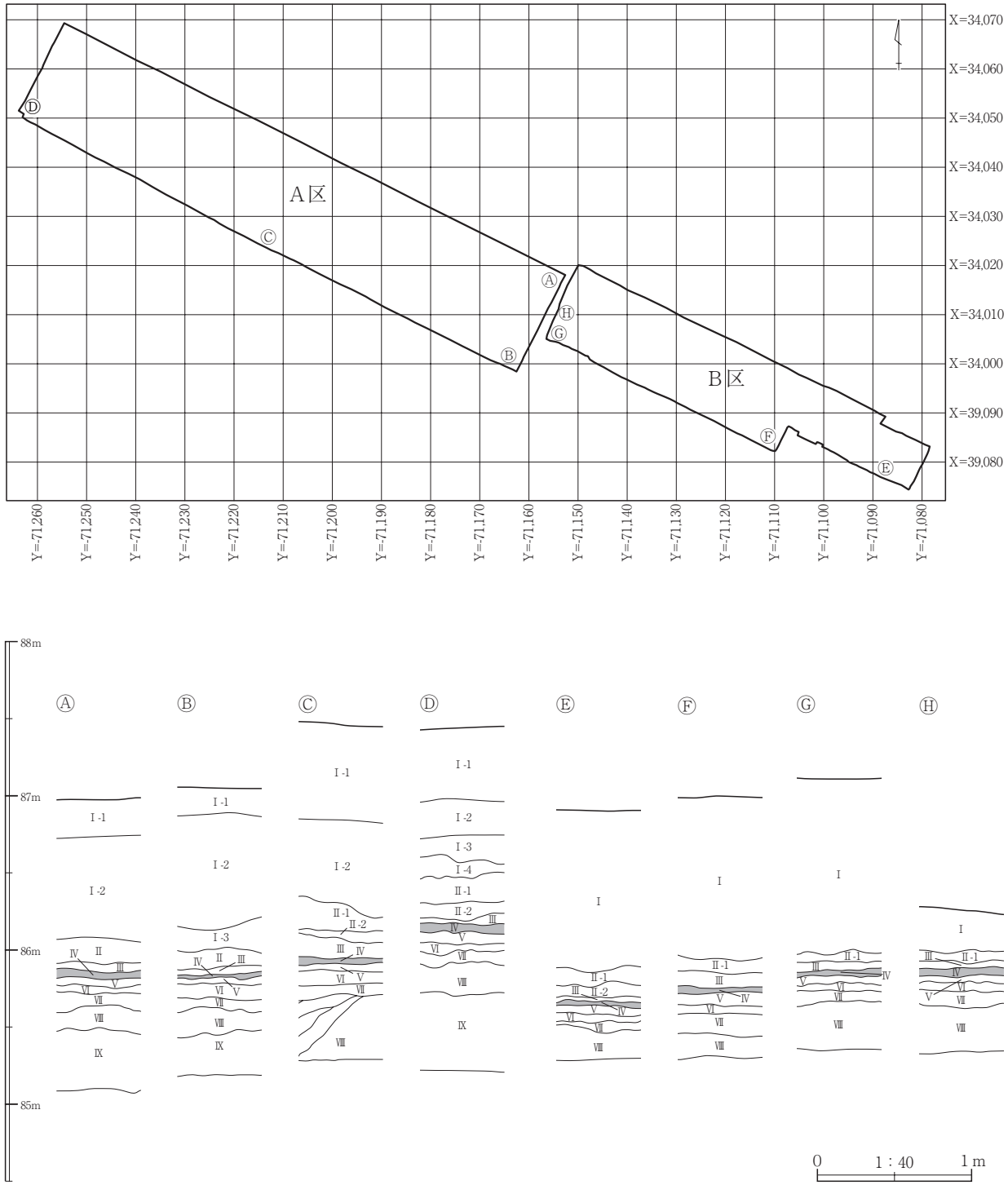
Ⅳ　基本層序

基本層序については両調査区において、攪乱を受けていない箇所を中心としてトレンチを設定した。Ａ区は調査区北壁に沿って大きく攪乱を受けているため遺存状態のよい南壁に、北東隅Ⓐ・南東隅Ⓑ・南西隅Ⓓ、また東西に長い調査区であることを鑑み、調査区南壁中央Ⓒの４箇所に確認トレンチを設定した。Ｂ区についてもＡ区と同様に調査区北壁は攪乱が大きいため南壁側にⒺ～Ⓗの４箇所にトレンチを設定し、それぞれについて詳細な観察を行った。各トレンチでの土層観察から、北西から南東に向かって緩やかな傾斜が見られるものの堆積状況は概ね同一とみなすことができる。

Ⅰ層は現代の造成土層であり、含有物等から細分が可能である。Ⅱ層は粘性のやや強い黒褐色土で造成前の耕作土層と考えられる。Ⅲ層は中世以降に堆積した As-B 軽石混土層である。Ⅳ層は天仁元年（1108）の浅間山の噴火により降下した As-B 軽石堆積層であるが、調査区内での堆積厚には差異が見られ、Ａ区中央およびＢ区西側においてやや厚くなっている。Ⅴ層は粘性の強い黒褐色土を主体とする As-B 軽石下水田耕作土層、Ⅵ層は締まり・粘性ともに強い褐灰色土で、As-B 軽石下水田耕作基盤層である。以下、Ⅶ～Ⅸ層については所謂地山層である。なお、「Ⅴ　検出された遺構と遺物」で詳述するが、Ａ区において As-B 軽石下水田に伴うⅤ・Ⅵ層に覆われⅦ層以下を掘り込む溝を検出している。

また、重機での表土掘削後の断面での確認のみではあるが、Ａ区の調査区南東の壁面には天明３年（1783）の浅間山噴火に伴う As-A 軽石復旧坑と考えられる掘り込みが散見された。Ｂ区ではⅣ層直上までⅠ層の造成土が堆積している箇所も多く、Ａ区のような復旧坑の確認には至らなかった。

Ａ・Ｂ区ともに発掘調査にあたっては As-B 軽石層（Ⅳ層）上面までを基準として重機による掘削を行い、以下水田面（Ⅴ層）を遺構面として手作業にて調査を進めた。



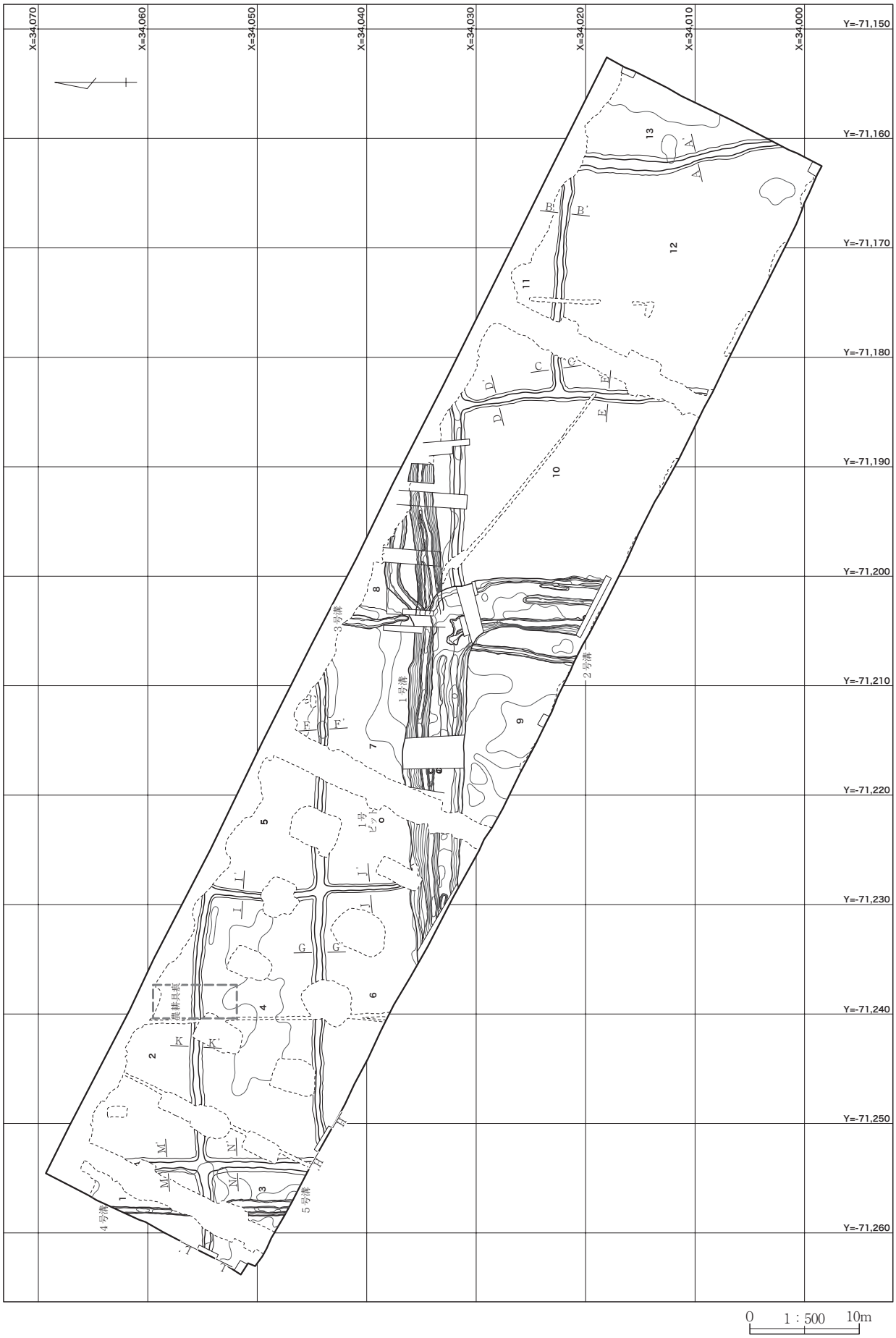
A区　Ⓐ～Ⓓ

Ⅰ　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり強く、粘性弱い。造成土層。含有物により１～４に細分。
Ⅱ　黒褐色土（10YR3/2）締まり強く、粘性やや強い。造成前の耕作土層。粘性により１～２に細分。
Ⅲ　褐灰色土（7.5YR4/1）締まりやや強く、粘性弱い。As-B 軽石混土層。
Ⅳ　黒褐～黄灰色土（2.5Y3/1 ～ 4/1）締まり弱く、粘性弱い、As-B 軽石１次堆積層。
Ⅴ　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。As-B 軽石下水田耕作土層。
Ⅵ　褐灰色土（10YR5/1）締まり強く、粘性強い。As-B 軽石下水田耕作土基盤層。
Ⅶ　暗褐色土（10YR3/3）締まり強く、粘性やや強い。含有物少なく、肌理細かい層。
Ⅷ　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり強く、粘性やや弱い。粘質土層。
Ⅸ　にぶい黄褐色土（10YR4/3）締まり強く、粘性強い。鉄分が沈着する。

B区　Ⓔ～Ⓗ

Ⅰ　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり強く、粘性弱い。造成土層。
Ⅱ　黒褐色土（10YR3/2）締まり強く、粘性やや強い。造成前の耕作土層。粘性により１～２に細分。
Ⅲ　褐灰色土（7.5YR4/1）締まりやや強く、粘性弱い。As-B 軽石混土層。
Ⅳ　黒褐～黄灰色土（2.5Y3/1 ～ 4/1）締まり弱く、粘性弱い、As-B 軽石１次堆積層。
Ⅴ　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。As-B 軽石下水田耕作土層。
Ⅵ　褐灰色土（10YR5/1）締まり強く、粘性強い。As-B 軽石下水田耕作土基盤層。
Ⅶ　暗褐色土（10YR3/3）締まり強く、粘性やや強い。含有物少なく、肌理細かい層。
Ⅷ　にぶい黄褐色土（10YR4/3）締まり強く、粘性強い。鉄分が沈着する。

第５図　基本層序



0　1：500　10m

第６図　Ａ区調査区全体図

Ⅴ　検出された遺構と遺物

1　A区

（1）調査の概要

今回の発掘調査では As-B 軽石に覆われた水田面とそれに伴う南北・東西方向の畦畔を検出した。また、水田面を掘り込む後世の溝を５条確認しており、いずれも帰属時期は中世以降を中心とする。しかし、１号溝については最終的な埋没は近・現代であるが、As-B 軽石下水田以前の開削が考えられ、走行方向や規模を変えながらも断続的に使用された様子が窺われる。

なお、調査区の南側壁面を中心として、浅いながら As-A 火山灰の堆積する箇所が数箇所みられ、復旧痕（灰掻き穴）であった可能性が考えられる。

（2）As-B 軽石下水田（第６・７図、第１表、PL. ２～４）

被覆層と水田の残存状況　検出した水田面は、天仁元年（1108）の浅間山噴火による As-B 軽石１次堆積層により水田面全域が 1.3 ～ 6.9cm の厚さで直接覆われている（基本層序Ⅳ層）。Ⅳ層の堆積は調査区内で差異が見られ、中央付近で最も暑く堆積している。調査区北壁沿いおよび建物基礎が残る箇所については大きく攪乱を受けているが、調査区のほぼ全域で水田面を検出しており遺存状態は良好と言える。なお、本遺構面上位より掘り込まれた農耕具と考えられる掘削痕、溝５条、ピット１基を検出しており、いずれも中世以降の時期と考えられる。

水田域の地形　水田面は北西から南東に向けて緩やかに低くなる傾斜である。調査区四隅の水田面の標高は北西 86.11 ～ 86.13 m、北東 85.79 ～ 85.81 m、南西 86.09 ～ 86.11 m、南東 85.79 ～ 85.82 mを測る。比高差については調査区北側東西で 0.32 m、南側東西で 0.30 m、西側南北で 0.02 mを測り、東側南北で 0.00 m、北東から南西の比高差は 0.32 mとなっている。

畦畔の走向と区画　畦畔は東西方向の４条、南北４条の計８条を検出し、それらの畦畔に形成される水田面は 13 面検出した。なお X=34,030 付近の東西畦畔は、後述する調査区中央に位置する１号溝により削平されている。また、３号溝東側に若干の高まりが南北方向に認められ、この箇所についても後出する遺構により削平された南北畦畔があるものと考えられる。いずれの畦畔も走向方向に若干の蛇行が見られるものの、南北畦畔はおおよそＮ－２°－ W を、東西畦畔はおおよそＮ－ 89°－ W を指向している。畦畔ごとの間隔は、１号溝を基準として西側では南北畦畔の間隔は 24.88 m・25.56 m、東側では 20.94 m・20.10 mとなり、約５mの差異が認められる。東西畦畔の間隔は 9.38 ～ 12.61 mを測り、東西に幅をもつ区画を形成している。全体的な傾斜は上述したように北西から南東に向けて低くなるが、１面ごとの傾斜については大きな高低差は見られず、全体的には平坦な水田面となっている。

耕作土　締まり・粘性の強い黒褐色土（基本層序Ⅴ層）を耕作土層とし、層厚は 4.3 ～ 7.4cm を測る。また、水田耕作土表層に耕作が行われなかったことを示す黒色帯は確認されていないことから、As-B 軽石降下直前まで水田として利用されていたと考えられる。

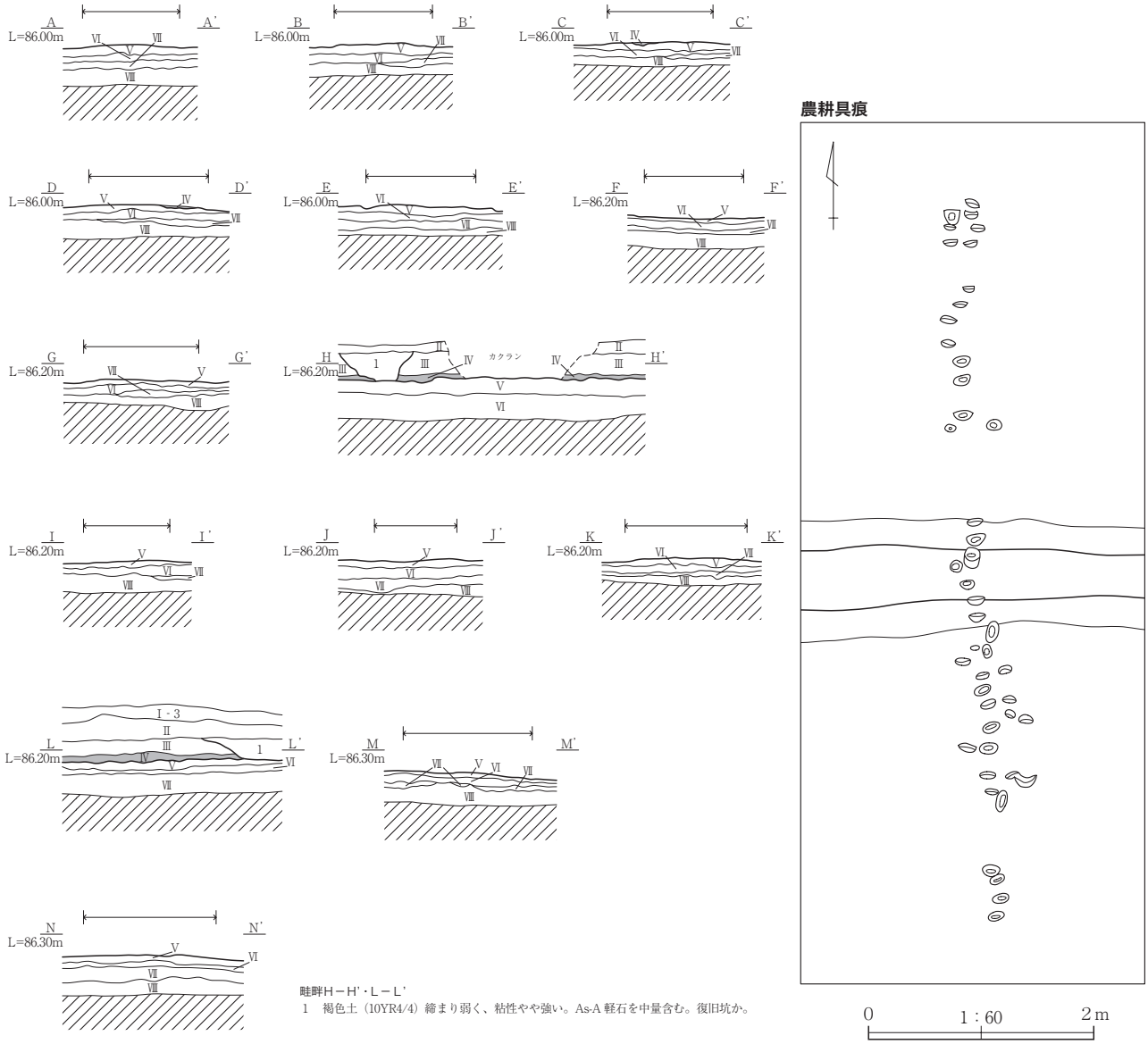
取配水の方法　畦畔交点付近に攪乱を受け不明瞭な箇所もあるが、残存する畦畔交点において水口や配水の水路等は検出していない。確認できる箇所が少なく判断材料に乏しいが、水田面の傾斜等から推察すると北東側に供給源があり、南西方向へと田越しにより配水していたと考えられる。

足跡等　水田面全域において凹凸は見られたが、明確な足跡や歩行列は確認できなかった。なお、調査区西端付近では半月状の掘り込みをもつ、鋤状の農耕具痕と考えられる掘削痕を南北方向で検出した（第７図）。窪みには As-B 軽石混土が堆積し、東西畦畔上を縦断して掘り込まれていることから、As-B 軽石降下後に掘削されたものと判断できる。

出土遺物　須恵器・土師器等が水田面直上から出土しているが、いずれも小破片のため図示には至らず。

第１表　Ａ区 As-B 軽石下水田計測表

田面	グリッド	面積（㎡）	東西（m）	南北（m）	標高（m）					備考
					NW	NE	中央	SW	SE	
1	X = 34,055 ～ 34.064　Y = － 71,255 ～ － 71,261	(47.30)	(6.585)	(9.454)	－	86.13	86.10	86.12	－	
2	X = 34,056 ～ 34,065　Y = － 71,229 ～ － 71,253	(111.83)	(23.77)	(6.467)	86.06	－	86.01	86.04	86.03	
3	X = 34,046 ～ 34,054　Y = － 71,255 ～ － 71,262	(53.81)	(6.938)	(8.513)	86.09	86.10	86.08	－	86.09	
4	X = 34,045 ～ 34,055　Y = － 71,230 ～ － 71,253	(234.49)	(23.65)	(9.948)	86.05	86.01	86.00	86.04	86.03	
5	X = 34,045 ～ 34,054　Y = － 71,210 ～ － 71,228	(97.73)	(18.37)	(9.031)	86.03	－	86.05	86.03	86.01	
6	X = 34,036 ～ 34,044　Y = － 71,229 ～ － 71,250	(123.18)	(21.44)	(7.337)	86.04	86.03	86.04	－	86.06	
7	X = 34,036 ～ 34,044　Y = － 71,205 ～ － 71,228	(170.60)	(19.33)	(6.032)	86.02	86.02	86.00	86.03	85.85	
8	X = 34,036 ～ 34,041　Y = － 71,184 ～ － 71,203	(74.02)	(18.34)	(6.491)	85.96	－	85.69	85.13	85.83	
9	X = 34,021 ～ 34,031　Y = － 71,205 ～ － 71,228	(132.07)	(23.07)	(10.05)	85.91	85.94	85.90	85.91	85.82	
10	X = 34,010 ～ 34,031　Y = － 71,185 ～ － 71,201	(290.73)	(15.55)	(21.44)	85.85	85.86	85.88	85.86	85.85	
11	X = 34,023 ～ 34,031　Y = － 71,165 ～ － 71,184	(71.03)	(18.27)	(7.796)	85.86	－	85.84	85.54	85.82	
12	X = 33,999 ～ 34,022　Y = － 71,161 ～ － 71,183	(381.37)	(19.79)	(18.76)	85.84	85.86	85.81	85.84	85.82	
13	X = 34,004 ～ 34,020　Y = － 71,154 ～ － 71,161	(72.77)	(7.902)	(16.65)	85.83	－	85.78	85.82	－	



第７図　Ａ区 As-B 軽石下水田畦畔断面図、農耕具痕平面図

（3）溝

1号溝（第８・９・11図、第２表、PL. ４・５・10）

遺構掘り下げの段階で、大きく３時期に分かれることが判明した。現代のプラスチック製品等を含む埋没面を１面、As-A 軽石を覆土に含む埋没面を２面、As-B 軽石下水田の形成以前に埋没した面を３面とした。

位置　X ＝ 34,018 ～ 34,036、Y ＝－ 71,190 ～－ 71,235　**重複**　２面段階で２号溝と重複し、２面段階においては本遺構が削平している。また、３面は As-B 軽石下水田より先行し、１・２面は As-B 軽石下水田より後出する。　**規模**　１面の走行方向はＮ－ 89°－ E、検出長 37.49 m、上端幅 0.98 ～ 1.33 m、下端幅 0.63 ～ 1.22 m、深さ 0.40 ～ 0.77 mを測り、断面は弧状および台形状を呈する。２面は X ＝ 34,033、Y ＝－ 71,205 付近でＬ字に屈曲して走行しており東西の走行方向はＮ－ 83°－ E、検出長 35.92 m、南北の走行方向はＮ－ 10°－ W、検出長 16.55 mで、上端幅 4.51 ～ 5.67 m、下端幅 2.67 ～ 3.43 m、深さ 0.37 ～ 0.79 mを測り、断面は台形状を呈する。３面は２方向に分岐して走行し東西の走行方向はＮ－ 89°－ E、検出長 43.23 m、南北の走行方向はＮ－３°－ W、検出長 13.45 mで、残存で上端幅 0.90 ～ 2.33 m、下端幅 0.56 ～ 1.79 m、深さ 0.09 ～ 0.49 mを測り、断面は弧状および台形状を呈する。　**覆土**　１面は褐灰色土、２面は As-A 軽石を含む暗褐色土、３面は締まり・粘性が強い黒褐色土を主体としている。　**出土遺物**　１面では現代の製品が確認された。２面からは陶磁器、須恵器、土師器等が出土し、うち陶磁器３点を図示した（１～３）。３面からは須恵器、土師器等が出土している（４～９）。また、埴輪と思われる小破片（10）、S 字状口縁台付甕（11）も出土している。　**所見**　３面とした溝の走行方向は上部の畦畔とほぼ同一であり、As-B 軽石下水田に先行する地割の存在を示唆するものある。

2号溝（第 10 図、PL. ５）

位置　X ＝ 34,020 ～ 34,030、Y ＝－ 71,206 ～ 71,207　**重複**　As-B 軽石下水田より後出する。１号溝の２面と重複し、本遺構が先行する。　**規模**　走向方向Ｎ－７°－ E、検出長 9.50 m、上端幅 0.69 m、下端幅 0.27 m、深さ 0.08 mを測り、断面は弧状を呈する。　**覆土**　As-B 軽石混土を主体とする。　**出土遺物**　なし。　**所見**　重複関係と覆土から中世と考えられる。

3号溝（第 10 図、PL. ５）

位置　X ＝ 34,036 ～ 34,042、Y ＝－ 71,203 ～－ 71,204　**重複**　As-B 軽石下水田より後出する。　**規模**　走向方向Ｎ－３°－ W、検出長 5.68 m、上端幅 1.07 m、下端幅 0.48 m、深さ 0.08 mを測り、断面は弧状を呈する。

覆土　As-B 軽石混土を主体とする。　**出土遺物**　なし。　**所見**　重複関係と覆土から中世と考えられる。

4号溝（第 10 図、PL. ５）

位置　X ＝ 34,047 ～ 34,063、Y ＝－ 71,257 ～－ 71,258　**重複**　As-B 軽石下水田より後出する。　**規模**　走向方向Ｎ－１°－ E、検出長 15.40 m、上端幅 0.55 m、下端幅 0.28 m、深さ 0.03 mを測り、断面は台形状を呈する。

覆土　As-B 軽石を多く含む。　**出土遺物**　なし。　**所見**　攪乱により不明瞭になるが、５号溝と合流する可能性が考えられる。覆土から中世以降と考えられる。

5号溝（第 10 図、PL. ５）

位置　X ＝ 34,046 ～ 34,052、Y ＝－ 71,257　**重複**　As-B 軽石下水田より後出する。　**規模**　走向方向Ｎ－１°－ E、検出長 6.01 m、上端幅 0.73 m、下端幅 0.55 m、深さ 0.05 mを測り、断面は台形状を呈する。　**覆土**　As-B 軽石を中量含む。　**出土遺物**　なし。　**所見**　覆土から中世以降と考えられる。

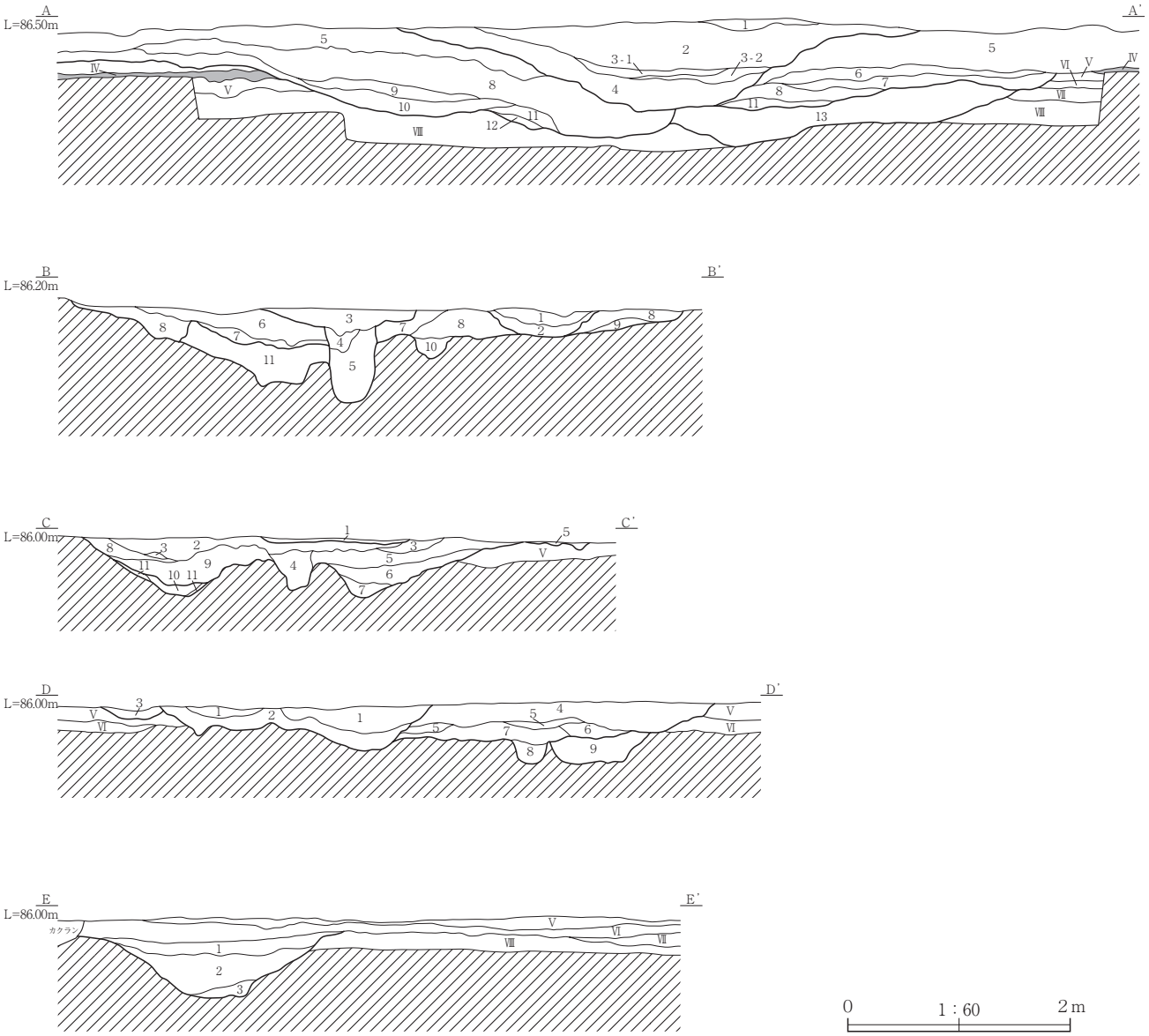
（4）ピット

1号ピット（第 10 図）

位置　X ＝ 34,038、Y ＝－ 71,222　**重複**　As-B 軽石下水田より後出する。　**規模**　長軸 0.38 m、短軸 0.37 m、深さ 0.16 mを測り、平面は円形、断面は弧状を呈する。　**覆土**　As-B 軽石混土を主体とする。　**出土遺物**　なし。　**所見**　覆土から中世以降と考えられる。

第８図　Ａ区１号溝平面図

１号溝



１号溝Ａ－Ａ'
1　褐色土（10YR4/4）締まり強く、粘性弱い。小礫を少量含む。１面覆土。
2　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり弱く、粘性弱い。小礫を少量含む。１面覆土。
3　黒褐色土（10YR3/1）締まりやや強く、粘性やや強い。粘性により細分。１面覆土。
4　黒褐色土（10YR3/2）締まりやや強く、粘性やや強い。小礫を中量含む。１面覆土。
5　にぶい黄褐色土（10YR4/3）締まりやや強く、粘性やや強い。基本土層Ⅲ層と同一層。
6　暗褐色土（10YR3/4）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を少量含む。２面覆土。
7　褐色土（10YR4/4）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を少量含む。２面覆土。
8　灰黄褐色土（10YR4/2）締まりやや強く、粘性弱い。As-A 軽石を中量含む。２面覆土。
9　にぶい黄褐色土（10YR4/3）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を中量含む。２面覆土。
10　黒褐色土（10YR3/2）締まり弱く、粘性やや強い。砂層。２面覆土。
11　にぶい黄褐色土（10YR5/3）締まりやや強く、粘性強い。基本土層Ⅶ層崩落土か。２面覆土。
12　黒褐色土（10YR3/2）締まり弱く、粘性やや強い。砂層。２面覆土。
13　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。含有物の少ない粘質土層。３面覆土。

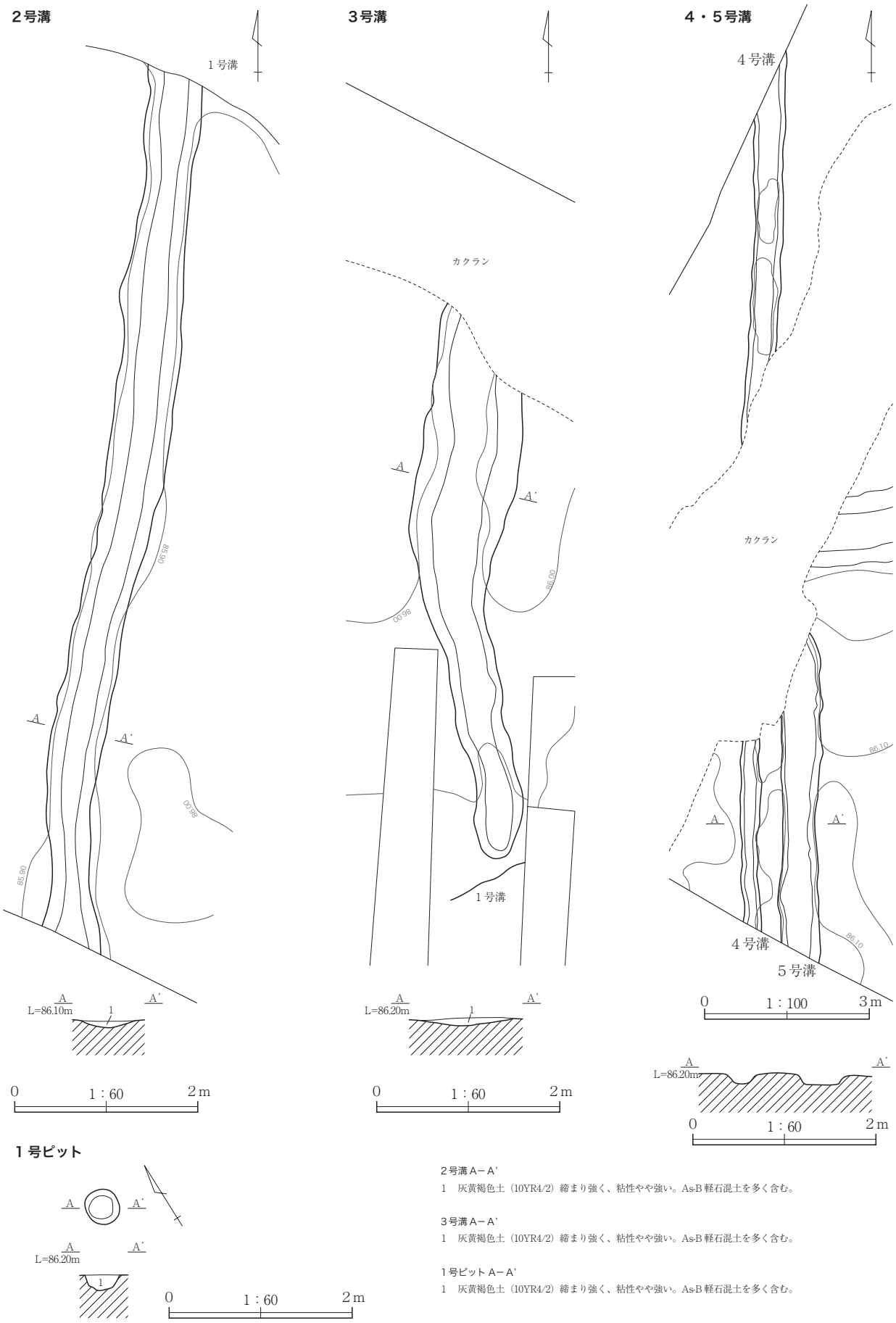
１号溝Ｂ－Ｂ'
1　褐色土（10YR4/4）締まり強く、粘性弱い。小礫を少量含む。１面覆土。
2　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり弱く、粘性弱い。小礫を少量含む。１面覆土。
3　褐色土（10YR4/4）締まり強く、粘性弱い。小礫を少量含む。近・現代のピット。
4　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり弱く、粘性弱い。黄褐色砂質ブロックを中量含む。近・現代のピット。
5　暗褐色土（10YR3/4）締まりやや弱く、粘性弱い。黄褐色砂質ブロックを少量含む。近・現代のピット。
6　にぶい黄褐色土（10YR4/3）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を少量含む。２面覆土。
7　褐色土（10YR4/4）締まり弱く、粘性やや強い。As-A 軽石を少量含む。２面覆土。
8　にぶい黄褐色土（10YR4/3）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を少量含む。２面覆土。
9　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり弱く、粘性やや強い。黄褐色砂質ブロックを少量含む。２面覆土。
10　暗褐色土（10YR3/4）締まりやや弱く、粘性弱い。黄褐色砂質ブロックを少量含む。２面覆土。
11　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。含有物の少ない粘質土層。３面覆土。

１号溝Ｃ－Ｃ'
1　褐色土（10YR4/4）締まり強く、粘性弱い。小礫を少量含む。１面覆土。
2　暗褐色土（10YR3/4）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を中量含む。２面覆土。
3　にぶい黄橙色土（10YR7/2）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を主体とする層。２面覆土。
4　暗褐色土（10YR3/4）締まり弱く、粘性弱い。暗褐色粘質ブロックを少量含む。２面覆土。
5　暗褐色土（10YR3/4）締まりやや弱く、粘性弱い。As-A 軽石を少量含む。２面覆土。
6　暗褐色土（10YR3/4）締まり弱く、粘性やや強い。As-A 軽石を少量含む。２面覆土。
7　褐色土（10YR4/4）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を少量含む。２面覆土。
8　にぶい黄褐色土（10YR4/3）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を少量含む。２面覆土。
9　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり弱く、粘性やや強い。小礫を少量含む。２面覆土。
10　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。含有物の少ない粘質土層。３面覆土。
11　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。黄褐色砂質ブロックを少量含む。３面覆土。

１号溝Ｄ－Ｄ'
1　褐色土（10YR4/4）締まり強く、粘性弱い。小礫を少量含む。１面覆土。
2　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり弱く、粘性弱い。小礫を少量含む。１面覆土。
3　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり弱く、粘性やや強い。暗褐色粘質ブロックを少量含む。２面覆土。
4　暗褐色土（10YR3/4）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を少量含む。２面覆土。
5　にぶい黄橙色土（10YR7/2）締まり弱く、粘性弱い。As-A 軽石を主体とする層。２面覆土。
6　暗褐色土（10YR3/4）締まり弱く、粘性やや強い。黄褐色砂質ブロックを少量含む。２面覆土。
7　褐色土（10YR4/4）締まり弱く、粘性弱い。黄褐色砂質ブロックを中量含む。２面覆土。
8　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。黄褐色砂質ブロックを少量含む。３面覆土。
9　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。含有物の少ない粘質土層。３面覆土。

１号溝Ｅ－Ｅ'
1　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。黄褐色砂質ブロックを少量含む。３面覆土。
2　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。含有物の少ない粘質土層。３面覆土。
3　黒褐色土（10YR3/1）締まり強く、粘性強い。黄褐色砂質ブロックを少量含む。３面覆土。

第９図　Ａ区１号溝断面図



2号溝A－A'

1　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり強く、粘性やや強い。As-B軽石混土を多く含む。

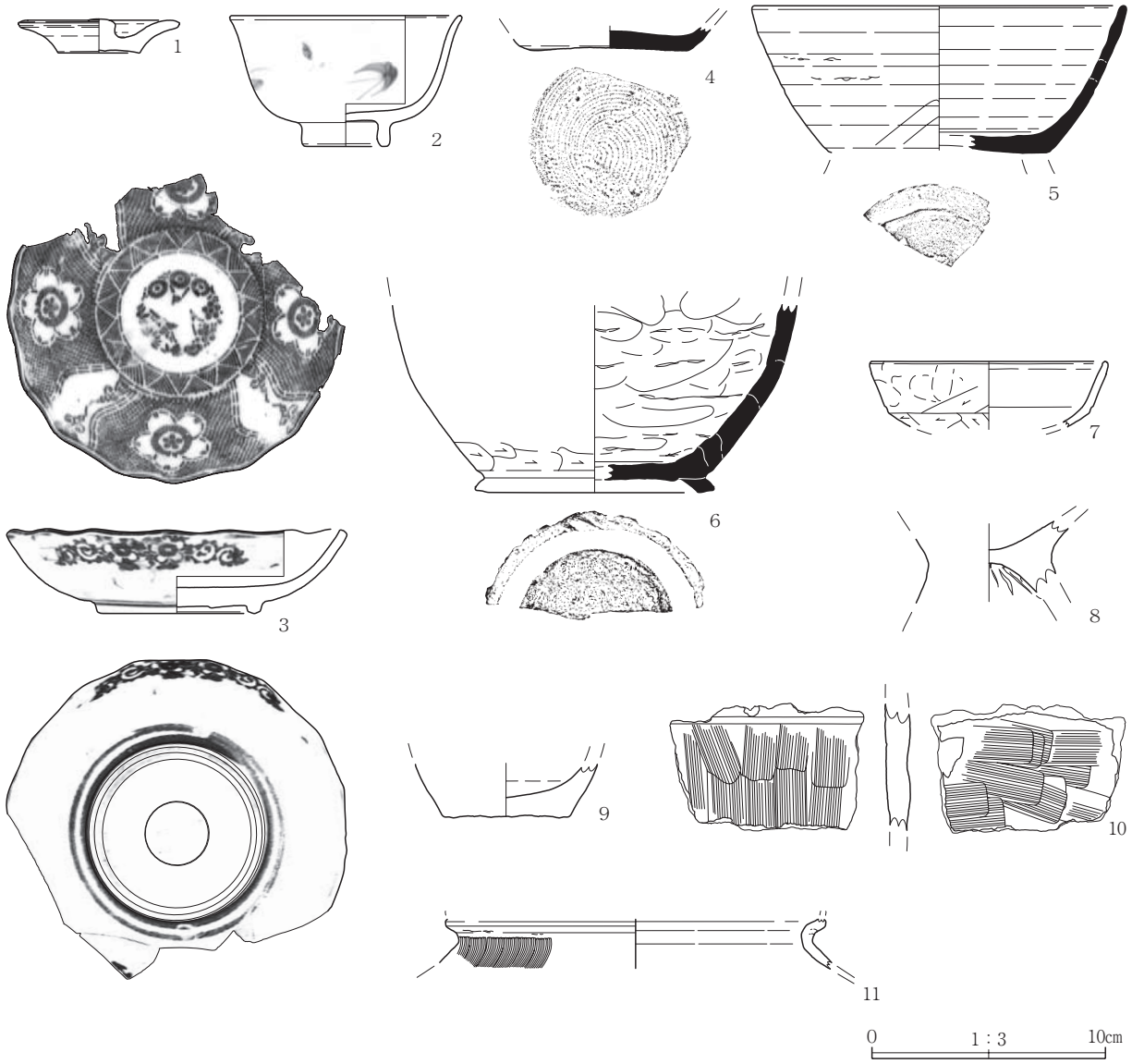
3号溝A－A'

1　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり強く、粘性やや強い。As-B軽石混土を多く含む。

1号ピットA－A'

1　灰黄褐色土（10YR4/2）締まり強く、粘性やや強い。As-B軽石混土を多く含む。

第10図　A区2～5号溝、1号ピット平面図・断面図

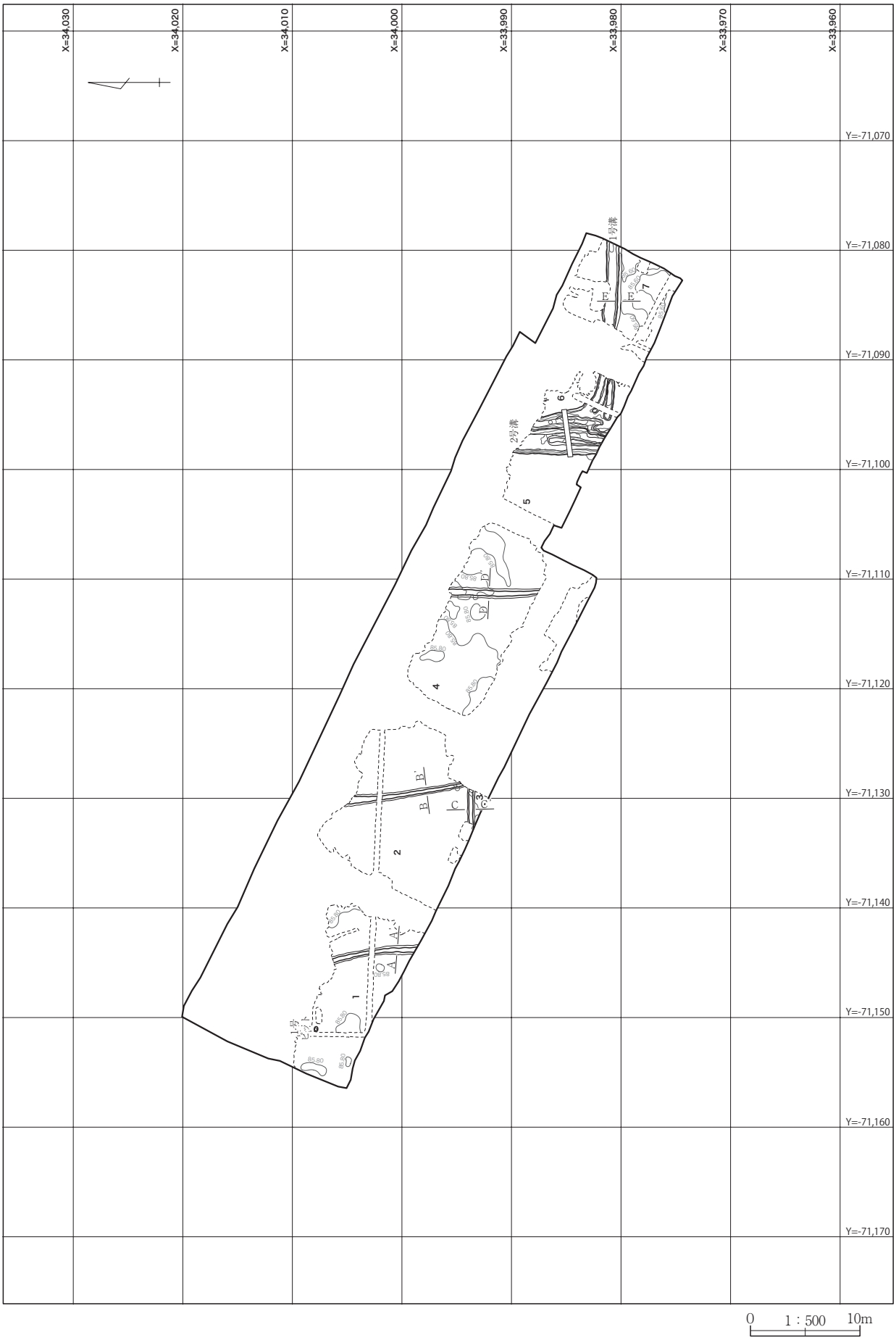


第 11 図　A区１号溝出土遺物

第２表　A区出土遺物観察表

１号溝

No	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	陶器 盞	〔6.8〕	－	1.4	粘土質	堅緻	浅黄色	外面：ロクロナデ成形。摘みは篦による回転削り出し。灰釉施釉。 内面：ロクロナデ成形。凸型の中央部は回転糸切り後ナデ。無釉。	3/5 残存。
2	磁器 碗	〔13.2〕	〔3.7〕	5.6	粘土質	堅緻	明緑灰色	内外面：ロクロナデ成形。底部（回転糸切り後）高台貼付。染付けによる蝶文様施文後、透明釉施釉。	口縁～底部 1/4 残存。 口縁形状：端反形。
3	磁器 皿（輪花皿）	14.5	6.9	3.6	粘土質	堅緻	明緑灰色	ロクロナデ成形後、回転篦削り調整。底部回転削り出し高台。口縁下の対面二ヶ所に染付けによる梅花及び蛸唐草連続文様施文後、透明釉施釉。見込み部梅花文ほか文様施文後、透明釉施釉。	2/3 残存。 口縁形状：輪花。
4	須恵器 坏	－	6.5	(1.1)	白色粒	良好	灰色	外面：ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面：ロクロナデ成形。	底部残存。
5	須恵器 高台付埦	〔16.0〕	－	(6.1)	黒色粒・白色粗粒	良好	灰色	外面：ロクロナデ成形。底部回転糸切り後、高台貼付。 内面ロクロナデ成形。	口縁～底部 1/5 残存（高台部欠損）。
6	須恵器 長頸壺	－	〔10.2〕	(8.1)	黒色粒・白色粗粒少量・白色針状物質	良好	灰色	外面：ロクロナデ成形。底部回転糸切り後、高台貼付。高台は丈が短くハの字状に開き、接地面平坦。 内面：ロクロナデ成形。輪積み痕が顕著で、あて具あるいは指による押圧調整。底面に自然釉付着。	胴部中位～底部 2/5 残存。 短頸壺の可能性もある。 鳩山産。
7	土師器 坏	〔10.3〕	－	(2.9)	黒･白色細粒、黒雲母	良好	にぶい黄橙色	外面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラ削り調整。 内面：口縁部ヨコナデ、以下指ナデ調整。	口縁～体部中位片。
8	土師器 高坏	－	－	(3.3)	黒・白・茶色粗粒、黒雲母	良好	にぶい橙色	外面：指ナデ成形。 内面：坏部ヘラおよび指ナデ。脚部シボリ成形後、ヘラ削り調整。	頸部片。 比較的大型。
9	土師器 甕	－	〔5.4〕	(2.3)	チャート粗粒・輝石	軟質	にぶい黄橙色	外面ロクロナデ成形。 内面ロクロナデ後、ヘラナデ調整。	体部中位～底部 1/2 残存。
10	埴輪か	－	－	(5.0)	黒・白・茶色粒、チャート粗粒・黒雲母	良好	淡黄橙色	外面：指ナデ後、縦位ハケメ。 内面：指ナデおよび細かな横位ハケメ。	胴部片。
11	S 字状口縁台付甕	－	－	(2.1)	黒・白・茶粗粒、チャート	良好	淡黄橙色	外面口縁部ヨコナデ、以下斜位ハケメ。 内面口縁部ヨコナデ、以下指ナデ調整。	口縁部片。



第 12 図　B 区調査区全体図

2　B区

（1）調査の概要

B区の調査では、A区と同様に天仁元年（1108）の浅間山噴火により降下したAs-B軽石に覆われた水田面と、それに伴う南北・東西方向の畦畔を検出した。また、水田面を掘り込む後世の溝２条、ピット１基を確認しており、帰属時期は中世以降を中心とする。本調査区は大部分が削平されており、As-B軽石層の遺存状態も悪い。そのため、南北・東西方向の畦畔を検出したものの、その交点および水口等は検出されなかった。溝は２条ともに検出時点では大きな１条の溝と見ていたが、掘り下げると遺構中に小さな溝が数条確認された。覆土の堆積状況や遺物の出土状況から、中世から近世にかけて造り替えながら近・現代に至るまで、長期間にわたり使用された遺構と考えられる。なお、周辺および下層の遺構を確認するため、１・２号溝ともにトレンチを設定し調査を実施したが、遺構は検出されなかった。

（2）As-B軽石下水田（第12・13図、第３表、PL. ７・８）

被覆層と水田の残存状況　As-B軽石１次堆積層は、層厚に違いはあるものの調査区の全面に確認された。特に調査区西端に厚く堆積しているが、部分的にAs-B軽石混土とみられる堆積も確認している。なお、調査区の北側半分は、工場施設の造成により水田面が削平されており、全体的にA区に比べると遺存状態は悪い。本遺構面上位より掘り込まれた中世以降の開削と考えられる溝を２条検出しており、底部は水田面下まで達している。その他、As-B軽石混土を覆土とするピットを１基検出した。

水田域の地形　水田面は北西から南東に向けて緩やかに低くなる傾斜である。調査区四隅の比高差については調査区北側東西で0.19 m、南側東西で0.24 m、西側南北で0.01 mを測り、東側南北で0.05 m、北西から南東の比高差は0.24 mとなる。

畦畔の走向と区画　南北畦畔は３条、東西畦畔は１条、水田面は７面検出した。南北畦畔はおおよそN－9°－Wを指向している。東西畦畔はわずかにしか検出されなかったが、N－89°－Wを指向している。南北畦畔の畦間は西から順に芯心で14.32 m、17.62 mを測る。東西畦畔は検出された畦畔が１条のみであるため、畔間は計測不能である。

耕作土　締まり・粘性の強い黒褐色土（基本層序Ⅴ層）を耕作土層とし、層厚は2.87～9.4cmを測る。また、水田耕作土表層に耕作が行われなかったことを示す黒色帯は確認されていないことから、As-B軽石降下直前まで水田として利用されていたと考えられる。

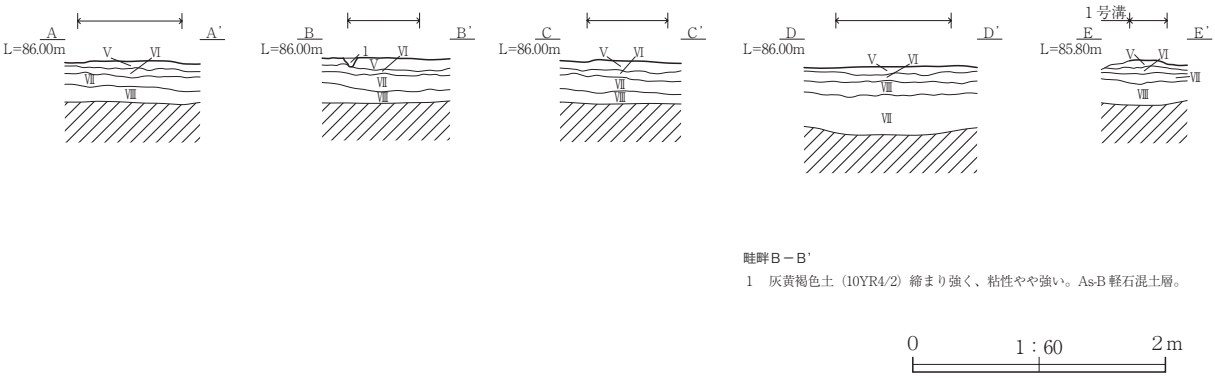
取配水の方法　残存する畦畔には交点が見られず、水口や配水の水路等は検出していない。水田面の傾斜等から判断すると、北西側に供給源があり南東方向へと田越しにより配水していたと考えられる。

足跡等　水田面全域において凹凸は見られたが、明確な足跡および歩行列は検出していない。

出土遺物　土師器等が水田面直上から出土しているが、いずれも小破片で図示には至らず。

第３表　B区As-B軽石下水田計測表

田面	グリッド	面積（㎡）	東西（m）	南北（m）	標高（m）					備考
					NW	NE	中央	SW	SE	
1	X＝34,004～34.010　Y＝－71,144～－71,158	(67.76)	(12.11)	(7.170)	85.82	85.81	85.83	－	85.81	
2	X＝33,992～34,008　Y＝－71,128～－71,146	(115.58)	(14.42)	(13.68)	85.82	85.83	85.83	－	85.82	
3	X＝33,992～33,994　Y＝－71,128～－71,134	(1.98)	(3.156)	(1.268)	－	－	85.78	－	－	
4	X＝33,982～34,006　Y＝－71,110～－71,130	(133.0)	(18.04)	(12.82)	85.84	85.81	85.82	85.82	85.73	
5	X＝33,982～33,996　Y＝－79,098～－71,112	(73.15)	(12.35)	(7.638)	85.79	85.79	85.79	85.78	85.75	
6	X＝33,980～33,988　Y＝－71,078～－71,096	(24.59)	(16.66)	(3.565)	85.67	85.66	85.67	85.69	85.63	
7	X＝33,974～33,982　Y＝－71,078～－71,096	(33.33)	(14.79)	(5.602)	85.64	85.58	85.61	－	85.58	



第 13 図　B 区 As-B 軽石下水田畦畔断面図

（3）溝

１号溝（第 14 図、PL. ８・９）

位置　X ＝ 33,980 ～ 33,982、Y ＝－ 71,079 ～－ 71,087　**重複**　As-B 軽石下水田より後出する。　**規模**　走向方向はＮ－ 86°－Ｗを指向し、X ＝ 33,982、Y ＝ －71,095 付近で２号溝と合流する。検出長 15.64 m、上端幅 1.34 m、深さ 0.12 mを測り、断面弧状を呈する。　**覆土**　黒褐色土を主体部として、水田耕作土ブロックおよび As-A 軽石と As-B 軽石を少量含む。　**出土遺物**　陶磁器片等が数点出土しているが、小破片のため図示には至らず。

所見　出土遺物および覆土の堆積状況や出土遺物から、中世段階と近世段階の２時期に大別でき、中世から近世後期にかけて造り替えながら使用された遺構と考えられる。

２号溝（第 14 図、PL. ８・９）

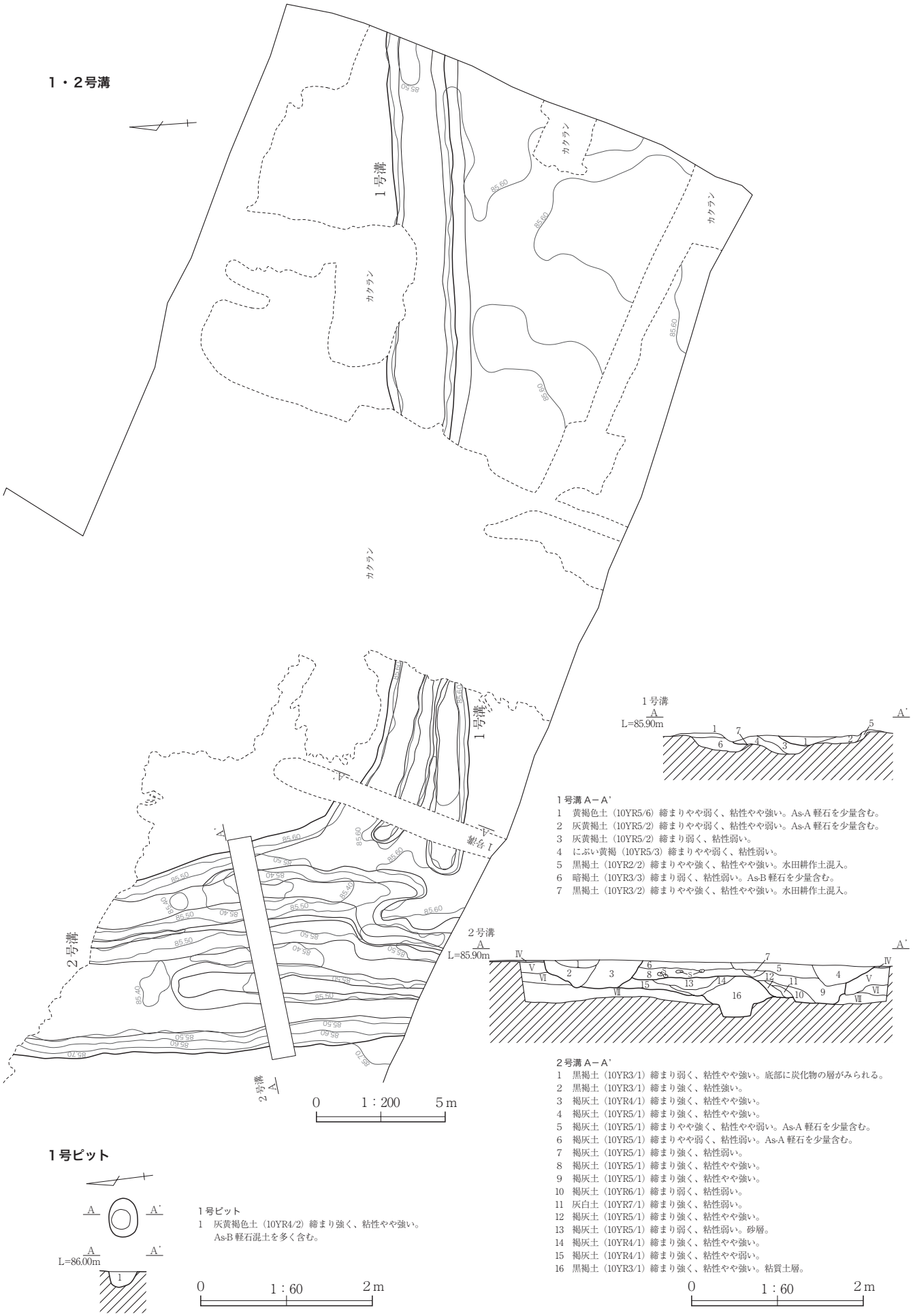
位置　X ＝ 33,981 ～ 33,990、Y ＝－ 71,094 ～－ 71,099　**重複**　As-B 軽石下水田より後出する。　**規模**　走向方向はＮ－ 2°－Ｗを指向し、X ＝ 33,982、Y ＝ －71,095 付近で１号溝と合流する。検出長 8.66 m、上端幅 4.24 m、深さ 0.39 mを測り、断面弧状を呈する。　**覆土**　褐灰色土を主体部として、水田耕作土ブロックおよび As-A 軽石と As-B 軽石を少量含む。　**出土遺物**　陶磁器片等が数点出土しているが、小破片のため図示には至らず。

所見　出土遺物および覆土の堆積状況や出土遺物から、中世段階と近世段階の２時期に大別でき、中世段階ではさらに時間差を見て取れる。１号溝と同様に中世から近世後期にかけて、造り替えながら使用された遺構と考えられる。

（4）ピット

１号ピット（第 14 図）

位置　X ＝ 34,001、Y ＝－ 71,151　**重複**　As-B 軽石下水田より後出する。　**規模**　長軸 0.54 m、短軸 0.42 m、深さ 0.19 mを測り、平面楕円形、断面はＵ字状を呈する。　**覆土**　As-B 軽石混土を主体とする。　**出土遺物**　土師器片が２点出土しているが、小破片のため図示には至らず。　**所見**　覆土から中世以降と考えられる。



第14図　B区1・2号溝、1号ピット平面図・断面図

Ⅵ　調査の成果とまとめ

1　調査の成果

本遺跡周辺の発掘調査では、天仁元年（1108）の浅間山噴火により降下したAs-B軽石に覆われた水田の検出事例が多く、条里型地割の存在が明らかとなっている。今回の２回にわたる発掘調査では、それらの調査事例と同様にAs-B軽石下水田と、それに伴う東西・南北方向の畦畔を検出した。

また、数度の掘り直しを経ながら近・現代まで利用されていた溝も確認しており、中でもＡ区１号溝は前章で詳述している通り３時期に大別することができ、古代の地割を踏襲しながら断続的に利用されていたことが明らかとなった。

以下ではAs-B軽石下水田と条理型地割についての検討と、Ａ区１号溝を中心とした用水の変遷についてまとめ、本遺跡周辺の土地利用の在り方について概観する。

2　As-B軽石下水田と条里型地割について

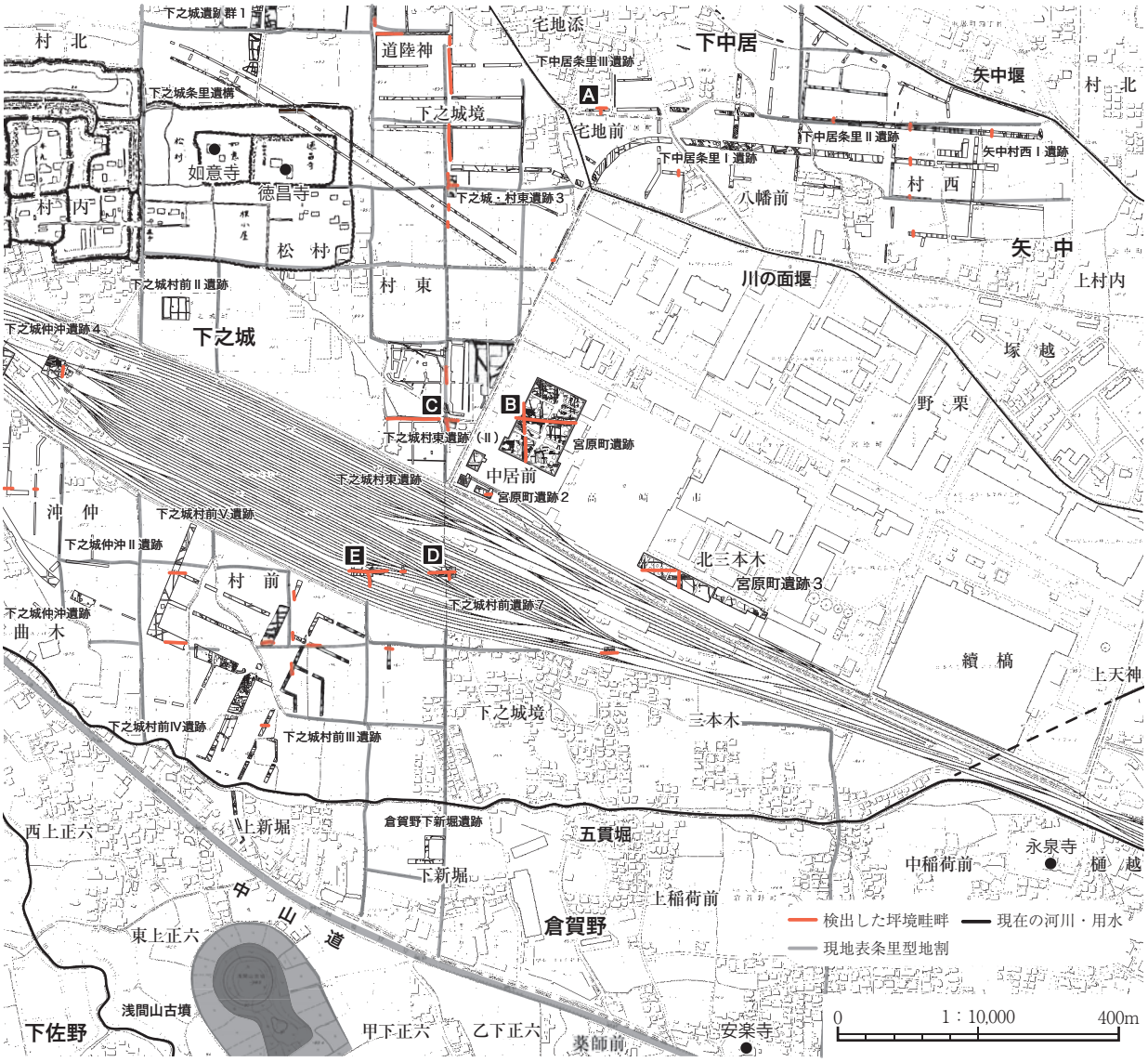
現在の本遺跡周辺は、国道17号バイパスと高崎線が横断し、大型工場が多く建設されている。それ以前には高崎操車場によって旧来の地割は南北に分断され、用水系統も新たな区画に沿うように迂回されている。現代の長野堰をメインとする用水系統が遡る可能性も指摘されているものの、根拠が明示されていないことからもこの論説には懐疑的にならざるを得ない。本遺跡の南方には、近世初頭に整備された中山道および倉賀野宿があることから、周辺は当該期に地割が改変されていると考えるべきであろう。このように、条里型地割を含む現地表の状況は、長期におよぶ様々な土地利用の在り方が累積した結果であり、埋没した一定時期を示す水田遺構と同列に扱うことはできないのを十分留意したうえで、As-B軽石下水田の調査事例と併せて条里型地割の坪交点および坪内区画について検討してみたい[(1)]。

（1）坪交点の検討

第15図は発掘調査で確認された各遺跡のAs-B軽石下水田の坪交点と、東西・南北大畦畔および坪境溝の位置関係を示したものである[(2)]。以下、遺構名の呼称は各報告書の記載に従う。

調査では５地点（Ａ～Ｅ）の坪交点が検出されており、確認された大畦畔は東西９条、南北10条である。下之城村前遺跡７のAs-B軽石下畦畔19・20からなるＤ地点と、同遺跡の畦畔４・５・６からなるＥ地点の坪交点距離は110.72ｍ、傾きはＥ－0.5°－Ｓを測る。２町離れているが、南北に位置するＣ・Ｄ間の坪交点距離は217.21ｍ、一坪あたり108.60ｍになり、傾きはＮ－0.5°－Ｗを測る。As-B軽石降下前の遺構だが、宮原町遺跡２のＳＤ４であるＢ地点、下之城村東遺跡（Ⅱ）の４・８溝の交点であるＣ地点は溝を坪境と捉えた。隣接するＢ・Ｃ間の坪交点距離は109.82ｍ、傾きはＥ－0.7°－Ｓを測る。第15図に示した範囲内での大畦畔の傾きもＮ－0.2～1.49°－Ｗ、Ｅ－0.43～1.3°－Ｓとなっていることから、条里型地割の軸は概ね東西・南北を指向していると判断できる。

現地表地割では東西畦畔が９条、南北畦畔は９条確認できるが、小字松村から村内にかけては現地表地割にズレがみられる。このズレは和田下之城の築城に伴って改変されたもので、徳昌寺・如意寺・根小屋により南北方向に拡張されている。西側は北帯曲輪および本丸・南曲輪の造築により、条里型地割を留めていない[(3)]。また、小字村西では、矢中堰と川の面堰に挟まれている影響からか、南北畦畔が東に約65ｍ、東西畦畔が北に約22ｍと条里型地割が大きく崩れている。他に畦畔によるものではないが南に流れる五貫掘は、現地表地割との距離を計測すると約106ｍを測ることから、五貫堀も坪境の地割に沿って走行しているものと考えられる。本遺跡および各遺跡の調査結果や、現地表条里から坪境を復元していくと、五貫堀以北から矢中堰・小字宅地添・村北までに130町近い条里型地割が出現する。

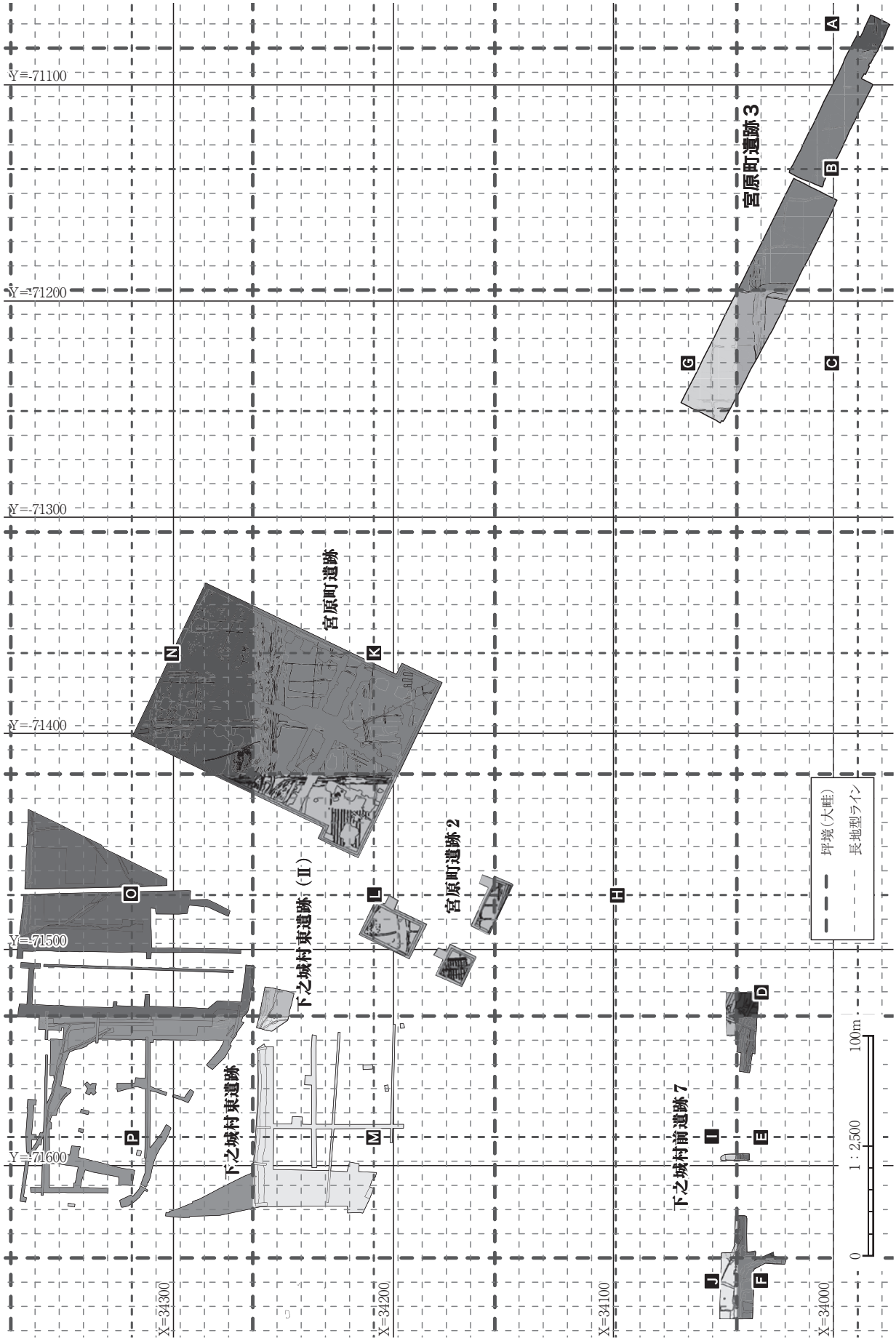


第 15 図　宮原町遺跡３周辺の旧地形と条里型地割

（２）坪内区画の検討

今回の調査では坪境の畦畔はＡ区において東西畦畔が１条、南北畦畔が１条検出された。現地表条里と併せて検討した結果、調査区の立地が１町方格の条里型地割４面にわたることが判明した。これに加えて本遺跡を中心に、周辺での調査結果をふまえて坪内区画について検討してみたい。対象としたのは、本遺跡、宮原町遺跡、宮原町遺跡２、下之城村東遺跡、下之城村東遺跡（Ⅱ）、下之城村前遺跡７である。およそ南北 390 m、東西 600 mの範囲に東西３条、南北５条の大畦畔および溝により区画された１町方格の条里型地割 16 面が検出されており、各々ＡからＰまでの呼称を付した（第 16 図）。

宮原町遺跡３Ａ区に該当するＢ・Ｃ・Ｇ区画では南北畦畔が概ね幅 12 間の間隔で検出された。宮原町遺跡３Ｂ区に該当するＡ区画では畦畔の間隔が狭まりおよそ幅６間となることから、半折型と長地型が混在すると考えられる。宮原町遺跡に該当するＫ・Ｌ・Ｎ区画の東西坪境は As-B 軽石降下前の溝により区分けされ、下之城村東遺跡・下之城村東遺跡（Ⅱ）にて検出されたＬ・Ｍ区画の北側坪境の溝と結合すると考えられる。これらの溝は航空写真でも同一の地割が確認できた。Ｋ・Ｎ区画のほぼ中央を南北に縦断する大きな南北畦畔は坪境の溝から 12 間に位置し半折型の区画と一致する。下之城村前遺跡７に該当するＤ・Ｅ・Ｆ・Ｉ・Ｊ区画では大畦畔による東西と南北の坪境が検出された。東西畦畔の南側では南北畦畔が約３間の間隔で並んでおり、長地型をさら



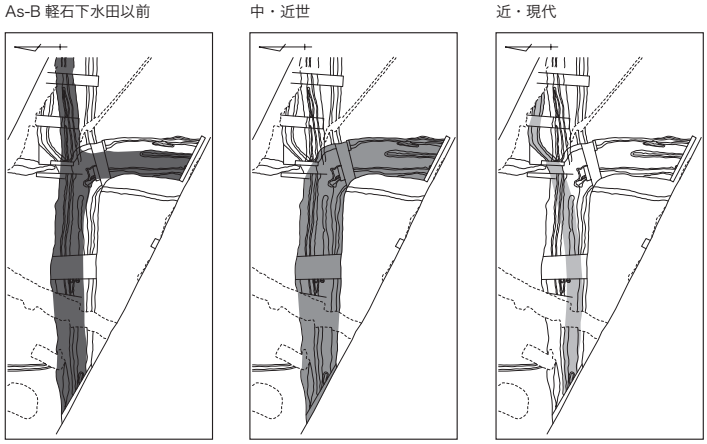
第16図　本遺跡周辺の坪内区画

に半分にした様子が窺える。東西畦畔の北側では硬く締まった平坦面が検出されており、こちらは水田として利用されていなかったと考えられている。

このように本遺跡周辺では坪境は一致する箇所が多いが坪内区画は大きく異なることから、条里型区画が制度としてではなく単に耕作単位として、その形を継承したと考えられる。

（3）用水の変遷

Ａ区１号溝は複数の流路痕跡が検出した総称で、時期によって走向・規模が異なっている（17 図）。最古段階は As-B 軽石下水田以前で、完全に水田耕作土に被覆されている。流路は東西方向とそこから南へと分岐する、T 字の走向となっている。溝単体の検出であるために、水田面の有無は不明であるが、底面付近の出土遺物からは９世紀前半が想定される。次段階は As-B 軽石下水田で、十字に畦畔が検出されている。中近世段階では、この水田面を切るように西から調査区中央付近で南へと流路変える逆Ｌ字形の溝が検出されているが、覆土中位から上位にかけて As-A 軽石が多く混入していることからも、天明３年以降に埋没したと考えられる。最も新しい段階は東西方向に走向する工場建設以前の溝で、明治 17 年の日本鉄道開通により南北の走向が分断されたためか、東西方向のみの流路となっている。これらは壬申地券地引絵図および戦後の空中写真においても地割として残存しており、中近世の溝は用水路として遡ると本遺跡の北西において川の面堰から分水している。



第 17 図　Ａ区１号溝想定変遷図

周辺の遺跡では、As-B 軽石下水田以前に掘られた溝として下之城村前遺跡７で 10 ～ 12 号溝が検出されている。特に 10 号溝は As-B 軽石下水田が形成される以前の主要な水路であったとされる。As-B 軽石下水田と同時期の溝としては、宮原町遺跡２の２区ＳＤ３、畦畔の間に開削された下之城村前遺跡７の９号溝がある。これらの溝は条里型地割に沿う形にあり、その後も条里型地割を踏襲して溝を掘り直しながら近世まで継続している。これらのように長期間にわたり継続する溝として、宮原町遺跡のＳＤ６・７、宮原町遺跡２の２区ＳＤ２・４、下之城村前遺跡７の７・８号溝があり、時期差がありながらほぼ同位置に存在する。

以上のことから、本遺跡周辺における古代から現代に至るまでの重層的な遺構の検出は、溝や畦畔といった形状を変化させながらも、地割という意識が連綿と引き継がれていたことを示している。

3　おわりに

本遺跡周辺では As-B 軽石下水田が多く検出されており、当地域での条里型地割について発掘調査報告や論考がなされている。また、水田経営以前の開削と考えられる古段階の溝も広い範囲で検出されており、As-B 軽石下水田以前の地割の存在が指摘されている。しかしながら確たる開削時期は不明であり、それに伴う明確な遺構（水田面等）については周辺遺跡を含めても管見の限り検出されていない。今後の発掘調査では As-B 軽石下水田下層においての確認が不可欠であり、事例の追加・検討を重ねていくことで本遺跡周辺での条里型地割の導入について、より明らかとなっていくことが期待される。

最後ではあるが、今回の２度にわたる発掘調査に従事した作業員の方々、現地調査・報告書作成において御指導・御助言いただいた方々、調査進行に御協力いただいたすべての方々に謝意を記し、結びとしたい。

註

（1）米軍写真や迅速図等を利用した歴史地理学的な視点の分析は条里型水田の検討において極めて有効であるが、時間軸が混在した状態であたかも一筆書きのように安易に条里水田を論ずることは避けなければならない。水田という面で検出する遺構の特性を考慮した場合、考古学的にも過去の調査事例を丹念に精査する必要がある。

（2）今回の検討にあたり、比較的旧状を留めていると考えられる高崎市都市計画図（昭和 54 年）を下図とした。補助資料として県立文書館所蔵の壬申地券地引絵図「下中居村、下之城村、倉賀野村」、国土画像情報（空中写真）「MKT614-C10-12」および「MKT614-C10-13」を使用した。小字調査には『上野国郡村誌５』、『群馬県群馬郡倉賀野町全図』、『群馬県史通史編２』を参考とした。

（3）上稲荷にある「上稲荷前屋敷」、中稲荷前にあり倉賀野城の北を守護した「永泉寺の砦」についてもそれぞれ条里型地割を改変している。

参考文献

論文等

新井　仁　2008　「条里地割導入後の水田と集落の一様相 －前橋台地南部地域を中心として－」『研究紀要』26　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
かみつけの里博物館第 12 回特別展　2004　『1108 －浅間山噴火－中世への胎動』　かみつけの里博物館
群馬県教育委員会　1988　『群馬県の中世城館跡』
群馬県史編さん委員会　1981　『群馬県史』資料編３
群馬県文化事業振興会　1980　『上野国郡村誌５』
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2013　『自然災害と考古学』　上毛新聞社
条里制・古代都市研究会　2015　『古代の都市と条里』　吉川弘文館
高崎市市史編さん委員会　1996　『新編　高崎市史』資料編３　中世Ⅰ
高崎市市史編さん委員会　1998　『新編　高崎市史』資料編１　原始古代Ⅰ
高崎市市史編さん委員会　1999　『新編　高崎市史』資料編２　原始古代Ⅱ
高崎市市史編さん委員会　2000　『新編　高崎市史』通史編２
高崎市市史編さん委員会　2002　『新編　高崎市史』資料編８
高崎市市史編さん委員会　2003　『新編　高崎市史』通史編１
中島直樹・吉澤　学　2004　「群馬県玉村町における条里地割の復原」『東国史論』第 19 号　群馬考古学研究会
中里正憲　2000　「砂町遺跡における大畦畔の調査例」『群馬考古学手帳』10　群馬土器観会

発掘調査報告書

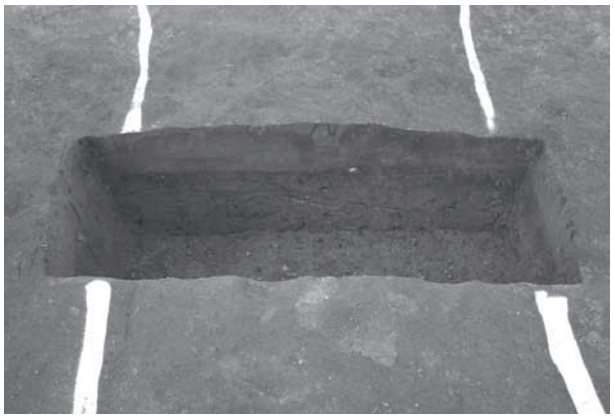
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1981　『下之城条里遺構の調査』
下之城村東遺跡調査会　1983　『下之城村東遺跡』
下之城村東遺跡調査会　1984　『下之城村東遺跡（Ⅱ）』
高崎市遺跡調査会　1996　『下之城村前Ⅱ遺跡』
高崎市教育委員会　1996　『下中居条里遺跡』
高崎市教育委員会　1998　『下中居条里遺跡Ⅱ』
高崎市教育委員会　2001　『下之城村前Ⅲ・倉賀野上新堀Ⅰ遺跡』
高崎市教育委員会　2001　『倉賀野条里Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡　倉賀野上稲荷Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡　三坊木Ⅰ・Ⅱ遺跡』
高崎市教育委員会　2001　『下之城村前Ⅲ・倉賀野上新堀Ⅰ遺跡』
高崎市教育委員会　2002　『下之城村前Ⅳ遺跡』
高崎市教育委員会　2003　『下之城村前Ⅴ遺跡』
高崎市教育委員会　2003　『下中居条里遺跡Ⅲ』
高崎市教育委員会　2004　『下之城仲沖遺跡』
高崎市教育委員会　2005　『下之城仲沖Ⅱ遺跡』
高崎市教育委員会　2006　『倉賀野駅北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡』
高崎市教育委員会　2008　『倉賀野下新堀遺跡』
高崎市教育委員会　2009　『下之城・村東遺跡３』
高崎市教育委員会　2013　『下之城仲沖遺跡３』
高崎市教育委員会　2013　『下之城村前遺跡７』
高崎市教育委員会　2014　『倉賀野上樋越遺跡』
高崎市教育委員会　2014　『下之城仲沖遺跡４』
高崎市教育委員会　2015　『倉賀野中里前遺跡２』
高崎市教育委員会　2016　『下之城遺跡群１』
高崎市教育委員会　2016　『宮原町遺跡』
高崎市教育委員会　2016　『宮原町遺跡２』

写真図版

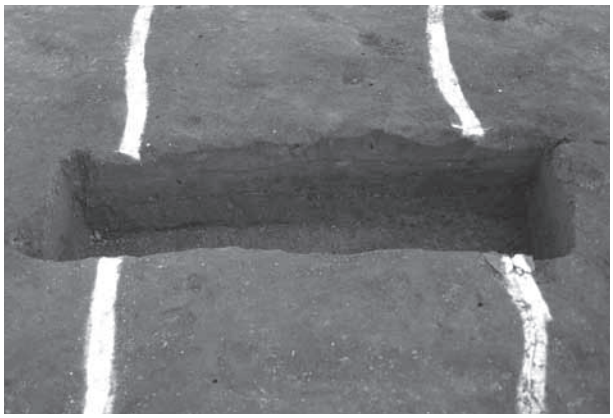
遺跡の位置と周辺の地形（1961年）

A区調査区全景（西から）

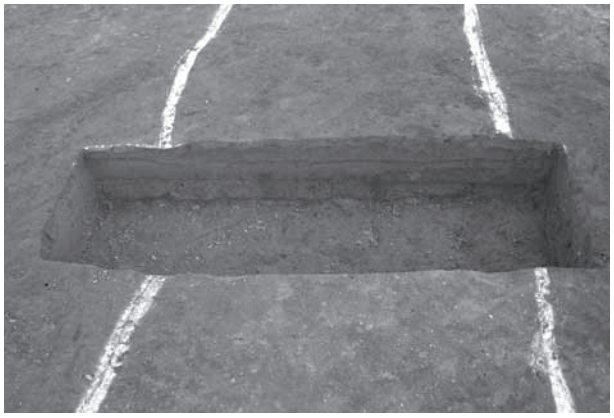
Ａ区As-B軽石下水田東側近景（東から）



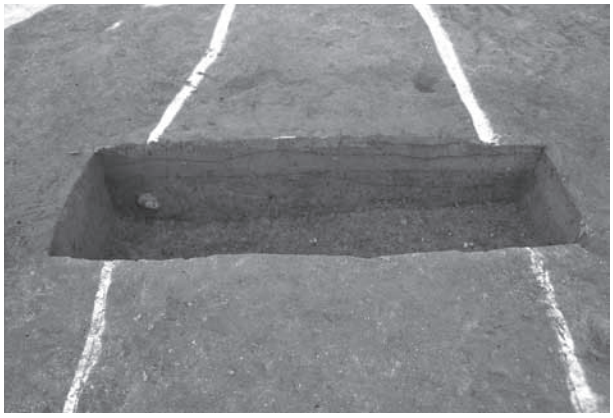
Ａ区畦畔Ａ－Ａ’（南から）



Ａ区畦畔Ｂ－Ｂ’（西から）

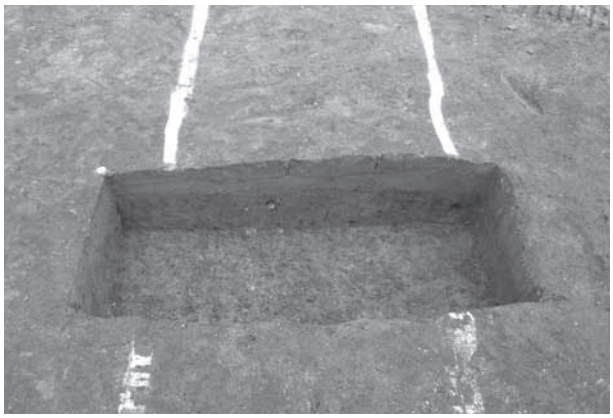


Ａ区畦畔Ｃ－Ｃ’（西から）

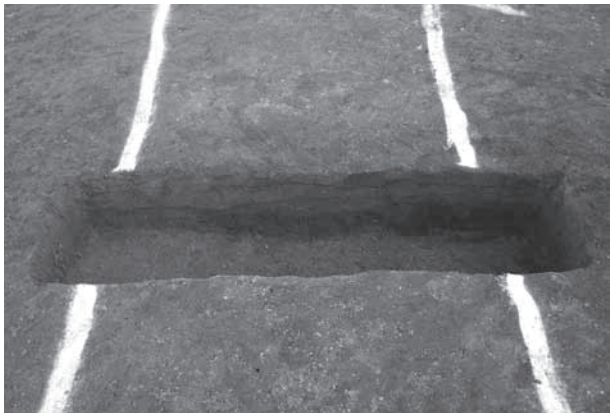


Ａ区畦畔Ｄ－Ｄ’（南から）

Ａ区畦畔Ｅ－Ｅ’（南から）



Ａ区畦畔Ｆ－Ｆ’（西から）

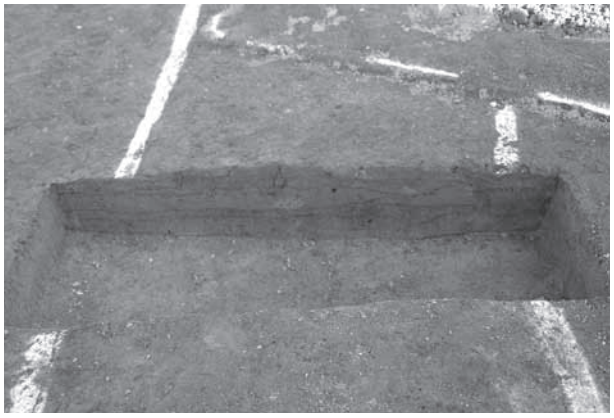


Ａ区畦畔Ｇ－Ｇ’（西から）

Ａ区畦畔Ｈ－Ｈ’（北から）

Ａ区畦畔Ｉ－Ｉ’（南から）

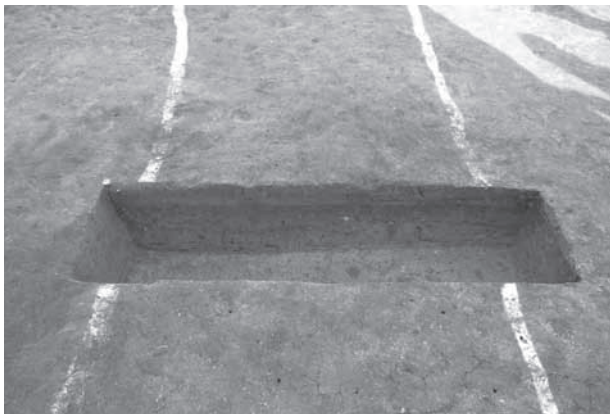
Ａ区畦畔Ｊ－Ｊ’（南から）



Ａ区畦畔Ｋ－Ｋ’（西から）

Ａ区畦畔Ｌ－Ｌ’（東から）

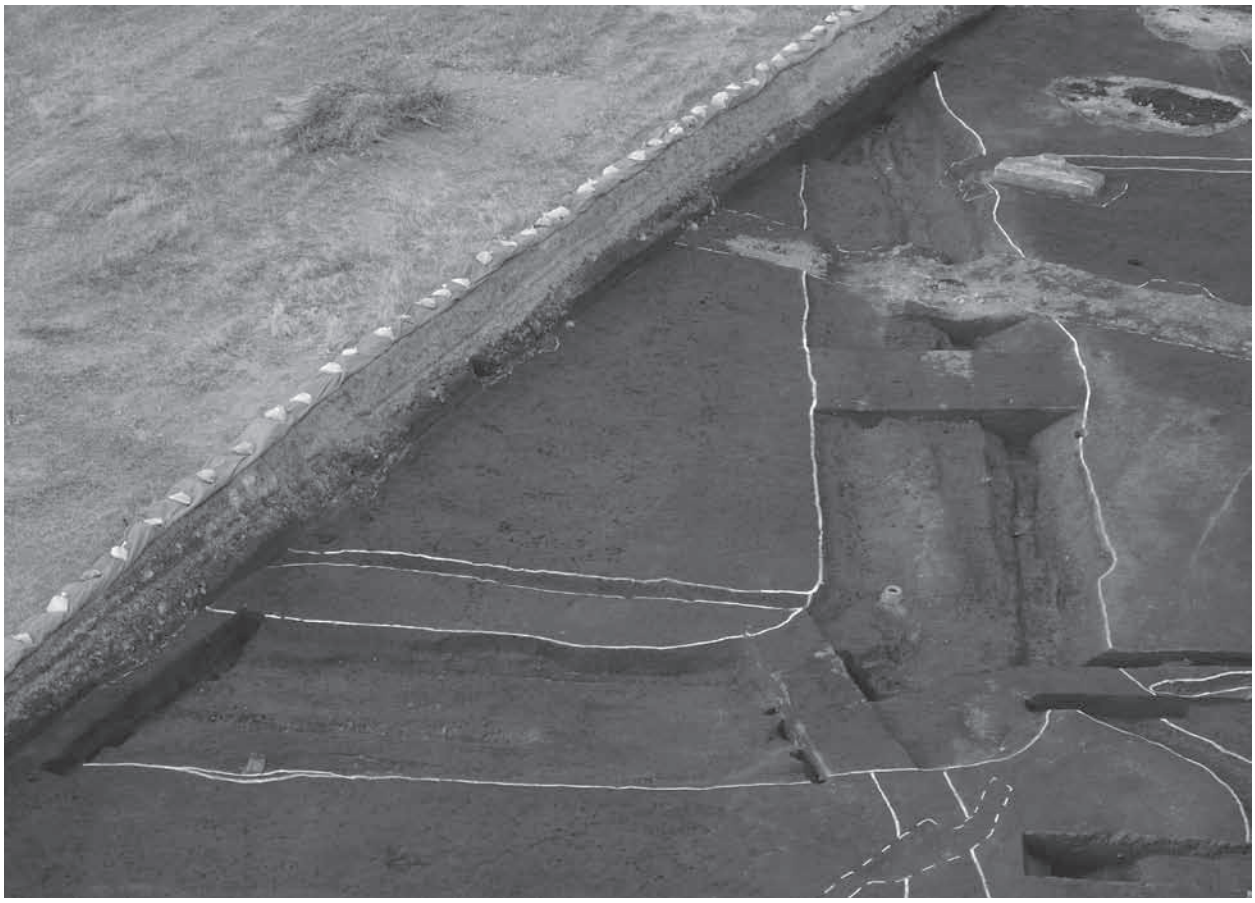
Ａ区畦畔Ｍ－Ｍ’（南から）



Ａ区畦畔Ｎ－Ｎ’（南から）

Ａ区農耕具痕完掘状況（北から）

Ａ区As-B軽石下水田調査風景（南から）



Ａ区１号溝全景（東から）

A区１号溝２面完掘状況（西から）

A区１号溝３面完掘状況（西から）

A区１号溝３面完掘状況（東から）

A区１号溝３面遺物出土状況（東から）

A区２号溝全景（北から）

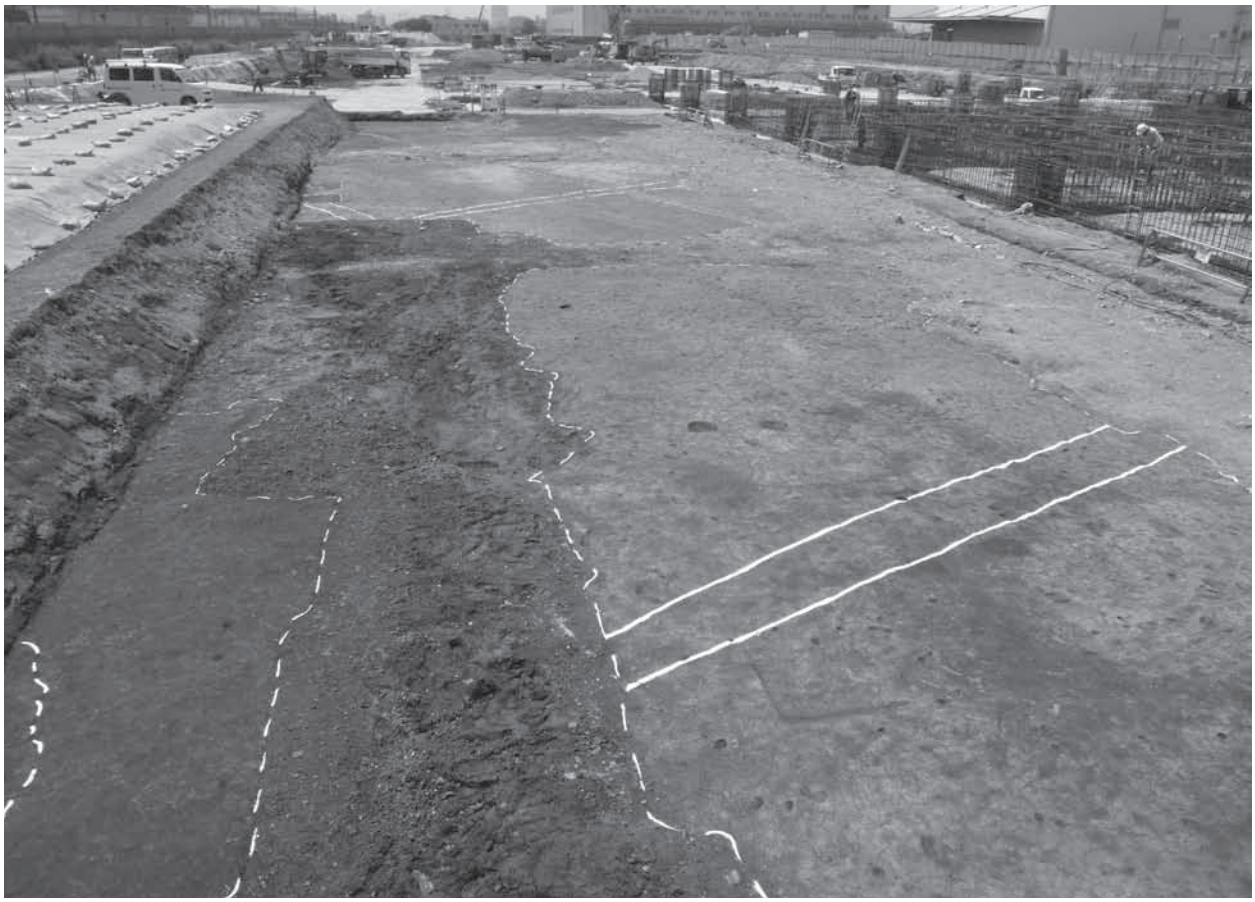
A区３号溝全景（南から）

A区４・５号溝全景（北から）

A区１号溝調査風景（西から）

Ｂ区調査区全景（西から）

Ｂ区調査区全景（東から）



Ｂ区 As-B軽石下水田西側近景（東から）

Ｂ区畦畔Ａ－Ａ’（南から）

Ｂ区畦畔Ｂ－Ｂ’（南から）

Ｂ区畦畔Ｃ－Ｃ’（西から）

Ｂ区畦畔Ｄ－Ｄ’（南から）

Ｂ区畦畔Ｅ－Ｅ’（西から）

Ｂ区As-B軽石下水田調査風景（南から）

Ｂ区１号溝全景（西から）

Ｂ区２号溝全景（北から）

Ｂ区１・２号溝全景（西から）

Ａ区基本土層Ａ（西から）

Ａ区基本土層Ｂ（北から）

Ａ区基本土層Ｃ（北から）

Ａ区基本土層Ｄ（東から）

Ｂ区基本土層Ｅ（北から）

Ｂ区基本土層Ｆ（北から）

Ｂ区基本土層Ｇ（北から）

Ｂ区基本土層Ｈ（東から）

A区

１号溝－１

１号溝－２

１号溝－３

１号溝－４

１号溝－５

１号溝－６

１号溝－７

１号溝－９

１号溝－８

１号溝－１０

１号溝－１１

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みやはらまちいせき３
書名	宮原町遺跡３
副書名	工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	－
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	443
編著者名	山田誠司・松村春樹
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371－0031　群馬県前橋市下小出町1-15-3
発行機関	高崎市教育委員会
発行機関所在地	〒370－8501　群馬県高崎市高松町35-1
発行年月日	2019年９月30日

ふりがな	ふりがな	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
みやはらまちいせき 宮原町遺跡３	たかさきし みやはらまち 高崎市宮原町２番地１	102020	753	(A区) 36°10'53	139°1'21	20181204 ～ 20181227	2,605.9㎡	工場建設
				(B区) 36°10'52	139°1'22	20190610 ～ 20190628	1,880.0㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
みやはらまちいせき 宮原町遺跡３	水田	平安時代	As-B軽石下水田	須恵器 土師器	天仁元年（1108）浅間山噴火によるAs-B軽石に覆われた条里型区画を伴う水田跡。
		中・近世	溝　７条 ピット　２基	須恵器 土師器 陶磁器	

高崎市文化財調査報告書第443集

宮原町遺跡３

2019年９月20日　印刷
2019年９月30日　発行

発行　高崎市教育委員会
〒370－8501　群馬県高崎市高松町35-1
TEL　027-321-1292

編集　技研コンサル株式会社
印刷　朝日印刷工業株式会社